

# アシンメトリー

momochan

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アシンメトリー

### 【Zコード】

Z0485A

### 【作者名】

momochan

### 【あらすじ】

ずっと忘れられなかつた初彼と再会を果たすミク。彼とは友達でいいと思っていたはずなのに、その気持ちは欲張りな物になつていて。 (実際にkanaが18歳の時の話を書こうと思ひます。1人でも共感してくれる人がいるとうれしいな )

## 手紙

鳴らない携帯。

もうずっと前に終わったはずの恋。

ずっと忘れていると思つてた。

でも、何で？？

ずっとあの人の事だけを考えている様な気がする。

時間が解決してくれると思つてた。

でも何でだろうね。

季節がめぐる度、どの季節の中にも君との想い出が蘇る。

君を好きだった私の記憶。

ずっと胸の中でもくすぶっています。

## 砂時計は止まつたまま。

冷たい季節、確か2月の初めくらい。

私は17歳。

高校2年生だった。

電車で一時間程かけて地元よりちょっとだけ、町の高校に通つている。

授業は何となく寝てて、放課後は趣味のバンド活動かバイト。

自由気ままに好きな事は何でもやつてゐるし親も適当で、そういうの毎日。

でも、どこかでいつも何かが足りないと感じていた。

心にぽつかり穴があいて、そこだけ何かが足りない感じ…。

その理由は自分が一番よく良く知つていた。

【彼にあいたい…】

私の頭をもうずっと前から過つてゐる言葉だった。

2年も前に別れてしまつた恋人“リュウタ”。

あの頃の私にとって、それはあまりにも昔の事だつたが、何故か忘れられないまま2年が過ぎていた。

「何か良いことないかな~。」

毎日毎日口癖の様につぶやいてゐる。

彼に別れを告げたのは自分のはずだつたのに、今も記憶の中で確かにリュウタは存在していた。

リュウタと別れて、新しい町で沢山の出会いや楽しい事が待つてゐるはずだつた。

なのに、リュウタのいない毎日は、まるで排気ガスでも吸つてゐるみたいに息苦しく、私の心はいつも寂しかつた。

（もう限界。頭がおかしくなりそう…。）

その頃の私はとても勇気がなくて、普通の女の子なら、すぐに彼に会いにいくだろうに、それさえできなかつた。でも自分でも気付い

ている。

(このままじゃダメ…)

私は携帯を取り出す。ゆっくりとその想いを打ち込んでいた…。  
【私、今でもリュウタの事が好きなんだ。他の誰と付き合ってもダメだつたよ。今更って言われるかも知れない。でも一回会つてみたいんだ。付き合つてとか言わないから。友達としてでいいから…】  
文字にしてみると、何だかとてもあっけなく思えた。

本当はもっと言いたい事が沢山あるはずなのに、うまく言葉にならなかつた。

私はそのメールを、私とリュウタの数少ない共通の男友達でもある“大樹”に送ることにした。

大樹は、同中の同級生で、今でも『飯を食べにいつたり、お互いに恋愛相談をする仲だ。

性格としては、少々自分の事で、精一杯という感じもあつたので、あまり期待はしていなかつたけど…。

大樹からの変更が来たのはそれから三日後。

【解つたよ。今度リュウタに言つてみるよ。でもアイツ今彼女いるから、あんまり期待するなよ。】

…今彼女がいる。

その事は私も噂で聞いていたので知つてている。

私と別れた後、電話をくれたリュウタは、  
「お前が忘れられない。やりなおしたい。」  
と言つてくれた。

それを断つたのは私。

その後できた彼女とはもうすぐ一年になるという。

その噂を聞いた時、一度は（良かつた…。彼女できたんだ。）と安

心した事もあつたけど、心のどこかでは、（ずっと私を好きでいてほしい…。忘れないでほしい…。）と強く思ったのも本音だった。リュウタと彼女が今までどんな時を重ね、どんな言葉を交して来たのか…。

私の時は止まつてしまつたけど、今も一人の時は動き続けている。あの時いじをはらずにやりなおせたら、私とリュウタは今も隣にいれたのかもしれない…。

私は大樹にメールを返す。

【うん。期待はしない。ただ、会つて友達みたいに話せたらいいと思つてるだけ。迷惑かけないし嫌つて言われたら、あきらめるから。】

嘘でも言い訳でもない本音だった。

【そつか…。あんまりハマると辛いからな。】

解つてる…。

傷つきたくない。

失いたくない…。

ゼッタイキタイシナイ

今更戻れないし嫌われるのは絶対に嫌だつたから。

その日は突然やってきた。

今日はもつすぐ卒業する先輩達のお別れ会である。

お別れ会と言つても、大きなホールを借りて行われる行事で、各部活がお世話になつた先輩達の為に色々と出し物を披露する。演劇やプラスバンド、チア部の発表会みたいなもんで、ろくに部活もやつていな生徒にとつては、その後の飲み会だけが目当てで出席するような会である。

私も例外なくクラスでもやる気のない女子グループに属していたので、もうすっかり井戸端会議の会場と化していた。

グループの中でも男好きでアイドルタイプの“菜穂”は いい男探しに夢中になっている。

「ねえ！…あの先輩超イケ面じやん！…菜穂声かけちゃおつかなあ

「あんなのがいいなんてあんた最近飢えてるでしょ。あつちの先輩のが素敵～～～！」すかさず“未織”も男の群れを品定めしている。「アンタ達イケ面なんて死語だよ！…」そんな事を言いながら、クールな“亜子”まで乗り出していた。

「ねえ、ミクはどの人がタイプ？今日は出会い満載の予感だよおー」菜穂が瞳を輝かせて背中にのしかかつて来た。

「…え！…」「ごめん、聞いてなかつた。」

「どうしたの？ミク、今日テンション低いじゃん？てゆーか最近ずっとじやん！」

「い、いや、そんな事ないよ！…」あわてて声が裏返る。それもそのはず。最近の私と言えば、リュウタの事ですっかり頭がいっぱいなのだ。

大樹からのメールはアレ以来来ていない。

期待なんかしていないつもりだつたし、誰かに話してすつきりしたかつただけだし…。

そう自分に言い聞かせていたけど、やっぱり心のどつかで本当は期待している自分がいる。私の心は大きく揺れていた。

「おつかしーなあ、ミク。いつもならキヤー キヤー 言いつばずなのにー絶対おかしいー！」菜穂がにやついている。

「分かつた！好きな人できたんでしょうー！」

「ちー違うよ！そんなんじやないからー！」

菜穂の言葉に思わず大きな声がでてしまった。（ヤバい！）

「あーーーやっぱりそうなんだーーー誰々ーー！」

「いや…なんてゆうか、片思いつていうのも違うし…」

言おうか言うまいか一瞬悩んだ。

（でも一人で抱え込める程私は強くなかった…。）

「実は…。」

はなしちゃつた…。

3人共いつになく真剣に私の話を聞いている。

…。

亜子が優しく言葉を選んで話し出す。

「そつかあ、そんな人がいたのか…。でも期待してるからメール頼んだんでしょう？」

「…。違う、本当に期待してないし、忘れないんだけど…。」

「忘れる必要なんてないじやん！好きな気持ちを伝えて何が悪いの？あんた臆病すぎるよー！」菜穂が体を乗り出す。そして何かひらめいた様に大きな瞳を輝かせた。

「よし！悩んでても仕方ないし賭けしようか……」

「賭け？？」菜穂がうれしそうに微笑んだ。

「ウジウジ悩んでずっと待つても仕方ないしさあ、もしも、今から三十分以内にメールが来なかつたら、その時はもう本当に期待しないで彼を忘れる！ そんで～ 今日のお別れ会が終わるまでにカツ口イイ先輩見つけて声かけて携帯聞いてくるつてのどお！？」

「はあ～～」脱力する三人をよそに菜穂はもつといい男探しを再会しようとする気まんまん。

「でもそれもいいかもなあ…。」

「ミク、本気？ 菜穂にのせられちゃ駄目だつつの…」

「未織つたらひつどーい！ いいじゃん、チャンスは逃すなだよお！」この後の飲み会でいい先輩捕まえなきや～ ゆくゆくは大学生の車もちになるんだから！

その時だつた…。

「なー何！？ 何かガタガタいうよ～～！」菜穂がおしりの下から何かを見つけた。

「やつだー！ 誰かの携帯ふんずけてたあ！」

「いいからちよつと貸しなさい！」亜子が携帯を奪い取る。

「あ！～！」四人は顔を見合せた。

【リュウタがね、最近彼女とマンネリしてるみたいで、お前の事話したら、会いたいって言つてたよ。アドレス教えたからな！】大樹からのメール。

私は心臓が止まりそうだった。

（まさかこんなメールが来るなんて全然思つてなかつた…。どうしよつ…。）

顔をあげると、三人はにやにや笑つている…。

「ミク今日の飲み会はお留守番だねー」菜穂が何だかうれしそうだ。

「べ、別に、彼女いるし、そんな意味じやないよー！」

「そんなの分かんないジャン。そーゆう事はアタックしてから言つてよねー。」

だつて

「うつむく私に菜穂は笑顔で言った。

「さっき言い忘れたけどー、もしも三十分以内にメールが来た場合は、絶対その彼ゲットしなきゃ駄目だからね。弱音吐かないの 分かった??」

卷二

私は菜穂のそういうところでもうらやましいとか思った。  
かわいくて、明るくて、自称ブリッコなんていつちゃうのに全然嫌  
みに聞こえない。

好きな人を見つければ  
すぐにぶつけられる。

(むりん、嫌いになつたらよひこやないけど...)。

そんな菜穂を見て、いのつかに少しばらりと頑張つてみよつかんて思つてしまつた。

ゼッタイキタイしない……。

あれほど堅く誓つたのに、たつた一つのメールに振り回される。  
：それはもう完全に恋の始まり。

リュウタが会いたいって。

大樹からのメールが頭の中をぐるぐる回っていた。

菜穂に言われた事もあって、私はすごく興奮していた。

（リュウタが会いたいって言つてくれた。やっぱり私リュウタの事好きなんだよな。付き合いたいなんて思わない。でも、彼と再会したら、せめていい奴だな…とかかわいくなったなとか思われたい。）

その頃の私と来たら、一日中そんな事ばかり考えていた。

そしてその頃から少しづつ昔の日記を読み返しては、リュウタとつき合つた中学時代を思い出し、ドキドキして眠れない事が多くなつた。

何冊にも及ぶ、淡くて子供じみた想いが、私の中に再び染み渡つていいく。

日記にはリュウタとの始まりも、終わりも細かく毎日しるされていた。

平成9年4月3日

今日は中学の入学式。女子は皆かっこいい男の子に夢中で、でも…何人かいたけどコレと言つてきになる人はいなかつたなあ。リュウタつていうすつじに嫌な奴がいたけど。ぶつかつた時「邪魔」とか言つて足踏まれた！初対面なのに態度デカイ。あーゆう人嫌い！あ、でも顔は結構かつこ良かつたかもしれないな。色白で、目が細くて、唇はぽつりしてて、髪が長い…いや、やっぱあんまりかな。

平成9年5月6日

席替えしたらリュウタの隣。嫌な奴と思つてたけど、意外と笑つた時とか、かわいいの発見した。私のピンクのシャーペン気に入つたらしくて、買ってきてあげたら喜んでやがつた。あと、給食のみそ

汁こぼした時「豆腐が一番飛んだ！」と叫んだ。あと自転車で電信柱に突撃してた。アホだな）。可愛い。そう言えばマコと、ヒナがリュウタの事好きとか言ってた。あいつ意外とモテルんだな。あいつ好きな人いるのかな？

平成9年6月20日

リュウタに国語の教科書借りたら筆記体の練習なんかしてて、ローマ字でびっしりタマちゃんの名前が…。リュウタの好きな人解つちやつた。最近誰かがリュウタはミクの事好きだなんて言ってたけど違うじゃん。何かがつかり（かも？）

平成9年7月18日

夏祭りにリュウタを誘つたけど、断られたからタマちゃんも呼んだし結局大人数。何か微妙だつたけど、いたしかたない。リュウ達、他校の男子と喧嘩した。全然一緒にあれん。

平成10年3月1日

最近リュウタとずっと話してない…。何かドキドキするしな。最近告白ブーム、クラス変わつて誰かがリュウタとつき合つたらどうしよう死んじゃうな。

平成10年4月2日

リュウタとクラス離れた。どうでもよくなつて「好き」って告白した。電話で。でも「つき合つて」が言えなくて、私の事どう思つて聞いたら、「嫌いじゃない。」だつて。これじゃ解らない。つき合つてつて今度ちゃんと言おう。

平成10年5月29日

何とかリュウタにオッケーもらつたけど、つき合つてる自信ない。誕生日も何も言つてくれないもん…と思つてたんだけど…一人で

帰つてたら自転車で来てくれた指輪くれたんだ もう死んでもいいとか思つ

ここまで読んで、私は思わず吹き出しちゃった。

何だ？この甘酸っぱい感じ。

彼との恋といつよりも私の片想いの記録。

野球部の彼にわざとテニスボールを転がして投げ返してもうとか、観覧車のてっぺんにキスをしたりとか、修学旅行の夜、部屋まで来てくれたけど、結局何もできなかつたりとか、ささいな事が全部、全部がドラマの様に胸に残つてゐる。

一年後も一年後も、彼を隣でみていたい…。幼い少女の初恋の記録が今の中に入つてくる。

世界がキラキラと輝いている。

あの頃の奇麗な想い出が心中に溜まつた灰色の空氣を浄化してくれるような気がした。

しかし、高校に入つて学校が離れると、私の気持ちは次第に新しい世界へと引き寄せられていく。リュウタとの距離が少しずつ離れていったのはその頃からだ。

平成11年4月20日

軽音楽部の見学で、ドラマのサヤと出合つ。念願のバンド活動を始める。楽しい。そう言えば最近のリュウタ嫌だ。高校入つてから、エッチな事ばかりだ。きっと新しい友達とかの影響なんだろつな。ただやりたいだけみたいに思えてくるよ…。それにバンドも男の子いるけどどう思つてるかな？口では賛成してくれるけど、本当は嫌だろうな。何かしんどいな。一人になれたらもつと音楽に好きな事できるかな？

それから私はリュウタと別れる事になる。

その後彼から電話をくれた事もあつたけど、（1人に慣れたうきつとすぐリュウタの事なんて

忘れられる。今は少し寂しいだけだ…）私は彼よりも、目の前にある新しい生活、夢、これから出会うであろう、沢山の人との出会いや恋に憧れていった。

大切な物は今、目の前にある幸せだって事に気が付く事ができずに…。それから沢山の人と恋をした。

バンド活動も盛んだった。週2回の練習に、月1回のライブ活動。沢山の歌を歌つたけど、恋をする度に、相手をリュウタと比べ、歌の歌詞に浮かぶのはいつもリュウタとの恋の想い出だった。子供だったと後悔したけど、その頃には彼はもうずっと遠い存在だった。

日記を閉じてミクはベットに横たわる。

（今、彼ともう一度繋がりを持てるチャンスが目の前まで来てるんだ。

後悔を重ね、臆病になっていた私だけど、このチャンスだけはやっぱり譲れない。絶対に。）

リュウタからのメールはまだ来ない…。  
私は決心した。（もう一度賭けをする。）もし、今から送るメールがリュウタの彼女にみつかっちゃつたらもうすっぱり諦める。もし見つからずに届いて、彼が返信してくれたら、もう一度彼に好かれる努力をしよう。

【元気？いきなりメールしてごめんね。久しぶりに話してみたくなっちゃった。】

たつたコレだけのメールを送信するのに一体どれくらいの時間がかかるんだろう？

でも、意外にもリュウタからの返信はすぐに私の元に届いた。

【久しぶりだな。大樹に話聞いて会つてみようかと思つてたんだけ  
ど、今足がないもんでお前ん家遠いしバイク買つたら行こうかな  
と思つてた（＾＾）】

普通に普通のメールで何か拍子抜けしたけど、このたつた一通のメ  
ールが、今までの空白を埋めてくれた様な気がしたんだ。  
【バイク！？免許なんか取つたの？すごいじゃん！絶対見たいんだ  
けど 買つたらソッコー見せてね！】

【おう！また電話するわ～。】

この何気ないメールから、私の迷いは一気に吹き飛んだ。  
(キタイしないなんて無理だ。絶対に彼の事あきらめない。)  
私の心は決ました。

彼がバイクを買つたらとか、彼が彼女と別れたら…なんて待てるわ  
けが無かつた。

(今すぐ会つて、彼との新しい関係を築くんだ。)

バイクなんていいもんじやないが、私も当時原付きくらい持つてい  
た。彼の家への行き方だつて、まだしつかりと頭にインプットされ  
てるし、いつでも迎えにいけるんだから…。

もう待つているだけじゃいられなかつたんだ。

## ルール。

初恋の彼が忘れられなくて、2年もかかってやっとメールアドをゲットした。

彼にはもう新しい恋人がいるし、絶対期待しない……なんて言ったけど…。

駄目でした…私今めちゃめちゃ彼の事で頭がいっぱいなんです…！

…キンコンカンゴーン

昼休みのチャイムが鳴った。

「ミク！起きてってばあ～～！…パンが売り切れる～～！」甲高い菜穂の声で目が覚める。

もともと勉強なんてする気全く無いんだけど、さすがに午前中いっぱい寝てたのには自分でもどうかと思った…。

「やだやだ、ミクったら最近誰かさんの事で頭がいっぱいだもんね。ホントたるみすぎー！」

「まあね。もういいのー開き直つたんだからーー！」

「もう来なくっちゃー…わやははー」菜穂がうれしそうに階段をかけおりる。

まだ冬だったので、思わずウトウトと眠たくなる暖かな日差しが射し込む午後。

たいへんな授業や、どうでもいい学校生活、稼いだつてすぐに消えちゃうお金…。

胸の中にたくさん積もつた不満ややるせなさ、そういう物で景色なんて感じられなかつたのに最近は前とはちょっとだけ違つてゐる。

(恋つてすじこ。でも怖い…。)

私の毎日は今、リュウタ一色で出来ていた。

リュウタとの少ないメールのやり取りと、いつ来るか解らない電話とか誘いを待つて、待つて…。

何の連絡もない日が続くのは当たり前。それからリュウタとの間に忘れちゃいけないいくつかのルールだつてある。

- 1、ミクからメールを送つちや黙目。
- 2、ミクから電話しちや黙目。
- 3、つき合つてつて言つちや黙目。

勿論リュウタが言つたわけじゃない（さすがにそんなひどい男じゃないです。）私自身が心得ている事で、このタブーをおかせば、リュウタが自分からまた離れていつてしまう事くらいちゃんと解つてているのだ。

それにその事をちゃんと守つていればいつかチャンスは訪れるとも思つていたし、待つのはちょっと寂しかつたけど、メールが来た時のうれしさの方が何倍も勝つていたから…。

でも、彼からのメールはたわいもない物ばかりだつたし、数もとつても少ない。

それでも、その少ないメールを全部保護して、読み返していれば、ちょっとだけ暖かい気持ちになれるのだった。

【今からスキーに行つてくるよ でも、バスの中超暇だーーミク何してるので?】

【何つて学校に決まつてんじゃん！そつちの学校いいね～スキーなんて行くんだ！こつちは退屈で朝からずっと寝てるだけ！】

【お前余計バカになるわ。まあ俺を超える事はできないだろつねだな。帰つたらバイク買つんだ～。今度見せてやる。】

【うん 楽しみだね】

彼女と一緒になの?って打とうとしてやめた。ウザイだけだから。普通の友達っぽいメール。

お互いに昔の話とかは一切しなかったし、私も友達っぽく振舞つた。そして何より彼自身“友達”としての一線を超えない様に心掛けていたのかもしない。

所詮は男と女、元恋人同士。いつでも関係を持てる距離がそこにはあつた。

彼がソレをしないのは、彼女に言い訳できるからだつたのか、想い出をけがさない為なのか、はたまたただ何も考えてないだけなのか、解らないけど、少なくとも私は、一秒でも長く彼との関係が切れない様にしたかった。友達でも何でも良かつた。

最も中学時代はまだお互い携帯なんて持つてなかつたから、メールのやり取りがあるだけでも、とても新鮮だつたんだけどね。

そして、スキーに行つた彼からは当然の様に2、3日連絡がなかつた（彼女が同じ高校じゃ当たり前か。）

4日目の夜、彼から久しぶりの連絡が入る。

【ただいま 楽しかつたよ^\_^明日から学校だけどテスト週間入るから午前中で終わりだよ!】

【こつちも学校午前中だよ。どうせ勉強しないけどね。】

【俺と一緒にやん!明日は孝介と浅田が来るよ~お前んち近かつたら誘つてやつたけどね!電車ないもんな~。】

ドキッとした…。

中学時代私とリュウタは同じ学区だつたけど、家が10キロ近く離れている上に、交通手段もほとんどなかつたから、根性で自転車で家まで行つた物だが、今それをやつてしまつと、あまりにも会いたいつて感じなので、私はまだ彼とちゃんと再会していない。（そん

な田舎が嫌で、お互にちょっと町の高校に通っているのだ。 )

別に、私としては、自転車だって容易い事だけど、引かれたくなくて精一杯気持ちを隠した。

【あたし暇で、暇で勉強なんか絶対する気ないから、一緒に遊んでよー言ってなかつたけど、あたし原付き買ったからリュウタん家行けるし】

送つてすぐやつぱりやめとけば良かつたかなつて思つ私は小心者だ。でもリュウタはそんの全然意識してないつて感じでメールはすぐ返つてくる。

【マジ?じゃあ明日2時頃俺んちまで来てくれる?乗せてつて…】

(やつぱりやつぱりやめとけば良かつたかなつて思つ)

胸が高鳴った。

【つさ、じゃあ学校終わつたら行くね。】

【待つてるわー。】

やつぱりその夜も眠れなかつた。

約2年ぶりの彼との再会。

パックして、マッサージして、制服にアイロンかけて、一応下着選んで(?)

(早く寝なきやー余計肌が荒れるよー)

久しぶりのときめきに、私の胸はもうパンク寸前だつた。

そして、つにに私は彼と再会する事になる…。

見なれた景色、でもどこか懐かしいその景色は、彼の家に着くまでの15分間、一つも変わらず、家も、学校も、草も、木も、私とリュウタが一緒に通学してたあの頃のままだった。

原付きを飛ばしながら、私は考える。

（あの頃にタイムスリップして、リュウタとやり直したい。リュウタが私を好きだと言ってくれたあの日に帰りたい。）  
もう一度あの頃に戻れる様な気がした。  
暖かな午後はいけない夢を見せるのです。

## 彼の隣り。

原付きで15分、私は彼を見つけて思いきりブレークをかける。

ズザ＝＝＝＝＝＝

砂利道の上で原付きが鈍い音を立てて止まった。

「リュウター！」

ヘルメットを乱暴に投げ出すと、私は彼の元に駆け寄った。

「ミク！」

リュウタがにこにこしながら手を降っている。

映画や漫画の世界なら、こんな時、思わず抱きついちゃったりするのかな？

でも、現実世界ではそれはやつちや駄目。最大のタブーなのだ。私も軽く手を降って、赤い顔を冷たい手のひらで冷やしながら彼の前でポーカーフェイスを装つた。

「久しぶり、お前全然変わらないな。チビだな。」

リュウタが目を細めて笑う。彼も全然変わっていない。ちょっとうれしい。

白くて奇麗な肌、少し長めに延ばした日に透ける細くて茶色の髪。それをかきあげるしぐさや、ポテつとしたタラコみたいな唇、背の高い彼と話す時はちょっと首が痛かつたな。それを上から見てるいじわるそうな細い目や、無駄におつきい手足を私に重ねる時の、子供の様な表情とか、記憶の中の彼と、目の前の彼が、重なりあって、色んな彼が、脳の中に一気に流れ込んでくる。

ドーパミン？？とか 波？とか解らないけど、たぶんそういう物質が私の脳の中に大放出されたような感じ。頭が真っ白になる。

彼の手も、唇にだつて触れた事があるし、一度はそんな事さえ当た

り前になつて、自分から別れてしまつたくせに、改めて彼を田の前にしたら、あの頃の自分がとても妬ましくなつて、後悔という一つの文字が、私の頭ん中いつぱいに広まつていくのが解つた。もうこの髪に触れる事も、唇を重ねる事も一度と無いんだ。目の前にいる彼と、恋をして、2年もつき合つたなんて信じられない。

私は何でこの人を手放しちゃつたの？？？

その瞬間、私は改めて彼に一目惚れしてしまつたみたいだつた。

「浅田と孝介来るまでここで座つてるか。ちょっと寒いけど。」コンビニの駐車場には私達以外誰もいなかつた。（平日の午後だつたしね。）

リュウタはモコモコのジャケットに手を突っ込んで、駐車場の小さな縁石に座ると、縁石をポンポンと叩いた。

隣に座ると、リュウタの柔らかい髪が私の耳に時々触れた。

「寒い。つてゆーかお前なんでそんな顔赤いの？」

「え？」 どきりとした。きっと今私の顔すごく赤いんだろうな。こんな時なんて言えばいいのか解らないよ。

思わずリュウタの隣だからだよ。とか言つたらどう思うかな……なんて考えたけど、あまりにもひとりよがりだつて解つてるから、ぐつと言葉を飲み込んでこられた。

「急いで來たから熱くなつちゃつただけだよ！」 笑顔の作り方が解らなくなつてた…。

彼は煙草に火を付けて、フワフワ輪つかを作つては嬉しそうに私に見せる。

その頃の私はまだ少し煙草が苦手だつたけど、彼の煙草の匂いは何かちよつと心地よくて、私はあつたかい布団から出られない朝みたいに、夢の中でまどろんでいる様な、不思議な気持ちになつていつたんだ。

「吸う？」彼が私に煙草を差し出した。

「ううん、いい…。」

私は彼の煙草の煙につつまれながら、学校の事とか、バイトの事とか、たわいもない話をすつとすつとしていたいと思った。もちろん彼の今カノの話題にはお互い触れなかつたけど…。

しばらくすると、孝介と、浅田がやつて來た。

「よお、お待たせ！ミクちゃんがいるなんて珍しいね。」

二人は一瞬驚いた顔をしてニヤニヤ顔を見合わせた。  
(やつぱり今更うちらが一人でいるのつて不自然なのかなあ… ) 少し悲しくなつた。

私は、孝介とも浅田とも学校が違つたけど、高校に入つてすぐの頃、よく駅で見かけてて、その駅は色んな学校の子が集まつたから、何となく顔見知りで何度も一緒に話した事もあつた。

二人はどうやら学校はやめてしまつた様で、近頃見かけてなかつたのだが、リュウタとはちょくちょく遊んでいたらしい。

もちろんリュウタの今カノとも、顔を合わせてゐるだろう。  
どうかと言えば、人に説教する様な感じの人達ではなさそうだけど、おもしろがつて彼女に言つちゃいそうな一人だ…。

リュウタはちよつと不機嫌そうに眉間にしわをよせて、二人に言つた。

「何ニヤニヤしてんだよ！別にそーゆうんじゃないから！なあ？」  
リュウタはめつたに怒らないけど、割と気分屋なところがある。今まさにちよつと気分悪い！つて

感じだらう…。こんな時は笑顔で話を合わせる。

「うん。そーゆうんじゃないから。うちらなんてもうとつくに終わつてんだし、たまたま暇で來ただけだよ。」

二人はとりあえずリュウタの機嫌が悪くなると厄介なので、  
「ふーん。」と言つたキリ、特につつこんで來る事もなく、そのま

ま皆でたわいもない話をして、口が沈む頃、寒いし帰らうつといふ事になつた。

「じゃあ、またな。」

リュウタが軽く手を振つて、少し笑つて帰つて行つた。

「うん、またね。暇な時メールちょうどだい。」私も笑顔で返す。でも解つてゐる。また今度はずつとずつと先で、もしかしたら“今度”なんてないかもしれない。

彼からのメールだつて、彼がフッと暇な時に、彼女が忙しかつたり、誰も遊ぶ人がいなかつたら、たまたま私を思い出してなんとなーくメールを打つてみるだけなんだろうな。

私はそんなメールを、また何日も待ち続けてしまつんだらうな。

リュウタが帰つてしまつと、急に空が暗くなつて、風がとても冷たかつた事に気づく。

彼の隣は暖かい、冬でも口だまりの様に私を包み込んでしまつ不思議な空間だつた。

何となく帰れなくて、立つてゐると、浅田が心配そうに私の顔を覗き込んで來た。

「お前、大丈夫か？ちゃんと帰れる？」

「何が？大丈夫だよ？」笑顔を作るけど、引きつつてゐるんだろうな

…。

「…リュウタの事好きなんだろ？でもあいつ彼女いるしやめといたら…？」

「…。」泣きそうになる。うつむく私に浅田は念を押す様にポツリポツリと彼女の事を話し出した。

本当は聞きたくなかった…。（何でそんな事言つの？別に友達でいいつて言つてんだからいいじゃん。）

でもその頃の私は何だかんだやつぱり甘かった。  
気付いてなかつた。彼女の存在の強さを…。自分の愚かさを…。

浅田はポツリポツリと言葉を並べた。

浅田の話によると、リュウタの今カノは、結構可愛くて、スタイルも良くて、すごく一途な女の子らしい。  
でも、一つ問題なのは、結構束縛が激しいって事で、女の子のメモリーが入っているなんて知れたら大変な事になる様だ…。  
だからリュウタの携帯には女の子の番号なんて入れれないはずだと言つ…。

「リュウタはきっとお前の事深く想つてくれないぜ…。どーゆうつもりか解なんないけど、あの彼女にバレたらただじや済まないし、俺はあんまり関わらない方がいいと思つけど…。」「うん…。」

私は聞いているようで、結構聞き流していたけど、あの頃は本当に皆に同じ事を言われていた。

好きな人がいるからって一緒になれないし、一緒になれたって幸せかなんて解なんない。

未来がどんなに暗くても、あなたがいないうりはマシ。  
どんな地獄の果てにだつて、行こうと思えば行ける気がするんだから!

ただし一人で…なんて、あたしじゃなくとも無理ですよね?

## 季節が変わる頃。

うとうと温かい日射し、じつせり春は近い様だ。

学校、バンド、バイト、恋…。

毎日がめまぐるしく過ぎて行く、季節もどんどん変わつてぐ。

私は相変わらず、携帯片手につまんない授業中に内職（手紙書いたりとかね。）の真つ最中！

「何書いてんのー??」「同じく暇そうなクラスメートに声をかけられた。

「ん? ノレ? 交換日記ー」

「はあ? うけるね。」笑われた…。

最近ミクは交換日記にハマつている。相手は当時一緒にバンドを組んでたサヤ。

サヤとはお互いに“バンド仲間”つて感じでプライベートには干渉しない…みたいのが最初あつたし、のほほんと平凡に暮らしてると私は違つて、さやは家庭の事とか、将来の事で色々大変で、あまりにも環境が違つたから、絶対解りあえないんじやないかななんて勝手に思つて…。

でも意外にも、彼女は私の歌詩を好きとつてくれて、価値観もどことなく似ていたから、いつからかお互い足りないとこを補える様な関係になつていた。

サヤが書いてくる物のほとんどは、日記と書つより彼女の“心の葛藤”とか、抽象的な物が多く、時々絵がついてたりもする。彼女の日記からインスピレーションを受けて、歌詞を作つたりもした。

彼女と私は頭いいクラスとちょっとバカなクラス（もちろんミクが

…）で、校舎も別だし、校内で出会う事はあんまりなかつたけど、週に2回、バンドの練習の日には、決まって二人一緒にお茶する事になつていた。

練習はだいたいあと2人のメンバーの学校に合わせて午後7時からだつたから、私達はマクナルドで、何時間でも色々な事を語り合つたり、歌をつくつたりした。

その頃のミクにとつて、バンドや歌を歌う事は、何物にも変えられない大切な物だつた。

私とサヤと、当時大学院に通つてたトシくんと、ヨツペ。年齢も住んでる所もバラバラの四人。

それぞれ違う日常を送つてて、週に2回だけ、一つの音楽の元に集まる四人。

お互いの事はあんまり知らなかつたけど、だからこそ、友達にはなかなか言えない事も平気で言えたし、何を聞いても軽蔑したり、嫌いになる事もなかつたし、お互いの事をよく知らなくとも、好きな音楽と一緒に演奏する時は一体感を感じられたから、自分だけの居場所を感じられる様な気もしていた。

私はあの頃やつぱり寂しかつた…。

リュウタとの消えてしまいそうな関係や、学校の授業も何となくついてけなくて、今いる場所や将来とかに対して、毎日言い様のない不安にかられていたんだ…。

メンバーはいつもそれぞれ自分のポジションがどんな感じかつて事ばっかりだつたから、あんまりミクの歌詞は注目されなかつた（笑）それでも私は沢山歌詞を書いた。皆につつこまれない分、何でも言いたい事を大きな声で歌えたんだよね。

ある時いつもの様に、マックでお茶してたらサヤがこんな事を言つ

た。

「わたしたち、やっぱり家出てみようかなあ。何か今の状況嫌なんだよね~。」

何とかなるつて感じで笑うサヤつてちょっととかっこになと思つた瞬間である。

私はまだリュウタとの事で答えが見つからなかつた。

これからどうなるのかは、ほとんど彼次第で、私の意志とは関係なく、運命に身をゆだねている状態だつたし、依然友達のまま進展は難しかつたし…。

それから2人がスタジオに向かつて、遅れてトシくんと山田ペガやつて來た。

「よお、ミクこないだ書いてきた詩なんか良かつたよ」トシくんが言つた。

「えつ！ いつも歌詞なんか見ないじゃん…ちょっとうれしいんだけど。」

「いくらなんでも自分らの歌の歌詞くらべタマには見るつて…」トシくんに頭をこすかれた。

それから私達は約用一回のペースで、色々なイベントに出でて演奏をしていた。

もつぱら、無名のアマチュアバンドの演奏は、立ち止まる人だつて少なかつたし、せわしない町の空気に搔き消されて、消えちゃうなくらい自分の小ささを感じさせたりもしたけど、

氣兼ねなく思つてゐ事を歌える時は何かちょっとすつさりしたものだ。

子猫の鈴の音、ちゃんととならない。あなたがキチンと首輪をしていてくれないせい。

あたしが逃げても関係ないフリ？がっかりさせずに楽しませてよ。

どうしたつていいの。悪い夢なら早く覚めて…！甘い夢の中でも  
つまでも溺れていたい…目を閉じて、一人が一つでいられる夢の中  
へいきたいよ。

例え投げ出した足が雲からはみ出し地に足着かずに彷徨つても、  
未完成な翼で不器用に飛ぶのは、小さなこの胸ドキドキしたいか  
ら…。

歌を歌うみたいに、心に思つていてる事がもつと素直に言葉になれば  
良かった。

そしたらもつとリュウタに気持ちを伝える事ができたかもしれない  
…。

私はきつと心の中の半分もリュウタに伝えられなかつた。  
あの子の好きよりも、もつと私の気持ちは勝つていて自信あつたの  
に…。

何年も待つたのに、どうして「好き」つて言えないの？  
彼女がいるから？彼女つてそんなにえらいの？

心に思う事はいつぱいあつたけど、言葉にはできなかつた。  
自分勝手な言葉で、彼を傷つける事も、自分が傷つくのも、関係が  
切れてなくなるのも怖かつたんだ…。

3月に入ると、私達の周りはまた少しづつ変わり始めていた。  
大学院に通う一人はそろそろ就職活動をすると言い、サヤは秀オク  
ラスから、普通クラスへ変更

届けを出した。

「だって、そんなに勉強したつていい大学受ける気ないから。」サ  
ヤはハツキリ言い切つた。

私は…。

季節が変わる。皆がどんどん未来に向かって歩き出す時、私はまだリュウタとの初恋に淡い夢を抱いているだけで、これから先の事は何一つ考えれなかつた。」

「ミク、こないださあ、ライブのチケット余つてるって言つてたよな？良かつたら俺行きたい！！一緒に行こうや！」

ある日、トシくんから電話があつて、私とトシくんは一人でライブを見に行く事になる。

何年も前からずっと好きで、私達のバンドでも曲を練習した某バンドの解散直前のライブだつた。

何年も前、ほとんど売れてなかつたはずなのに、そのバンドは気が付いたら大きなスタジアムで、解散ライブをやる様になつて、思わず時間の流れを実感してしまつ…。

憧れていた、いつも聞いていたバンドの解散が悲しいんじやない。昔小さなライブハウスで見た小さなバンドがこんなに大きくなつて、沢山の人からの声援を浴びるまでになる程時間は経つたつていうのに、私はあの頃のまんまで、恋さえ自分の物にできない。

今自分のやつているバンドでさえ、皆がそれ歩き出せば、いつかは絶対になくなつてしまつはず。そういう事が急に悲しく思えて來た。

（ああーやるせない。寂しい。居場所が見つからない…）

涙が滝の様い次々と頬を流れていつた。

「俺も泣けて來たー！」トシくんもなんかちょっと泣いている。（單にライブ 자체に…。）

大きなドームを彩る沢山のライトの花が花火みたいに生まれては消えて行く…。心を揺さぶる。

沢山のお客さんの声援を受けて、あの入達はどんなにいい気分なんだろう?

私はたった一人の心をつかむ事さえできないし、この先どうなるかも解んないのに…。

何だか言い様のない虚無感に襲われた…。

私達のバンドが解散したのは、それからしばらくたった日の事だった。

理由はやっぱりそれぞれの進路や、環境の変化で忙しくなったからだ。

その頃、あるイベントの審査員として来ていたラジオのプロデューサーみたいな人が、アマチュアバンドを取り上げたラジオ番組に出ないかと誘ってくれたりもしたけど、すでに解散後の事だった…。

人生ってドラマや映画みたいにはいかないんだな…。

大切な物が一つ消えて行つた。卒業とも呼べたかもしない。でも、あたしの中では“消えてしまった”って感じだった。

それから自分の中にある大事な物が、消えてしまう事が怖いと感じる様になつたんだ。

いくつも通り過ぎていつた昨日という幸せ。そして、明日には過去になつていつか消えてしまう今日という日。

迷つてゐるうちに何かを手放したり、答えが見つからないまま取り残されるかもしれない、そんな毎日に不安を感じていた。

そしてその頃始めてリュウタに言ひてはいけない事を言つてしまつ。

「ねえ、あたしの気持ち解つてるくせに、何でそんな態度でいられるの？彼女の事そんなに好きなの？だからはぐらかしてんの！」今までリュウタに対して彼女の事を問いつめたり、好きだと言わない様に気を付けてたのに…。

リュウタはそんな私にちょっとめんどくさそうに言ったんだ。

「うん、ごめん、そりや彼女が一番だから。」

金づちで頭を殴られた様な衝撃…。

リュウタは何だかんだ私の事はまんざらでもないのかと思つてた。なのに彼女の事を言われたとたん、私は突き放された。彼にとつては“その程度”の“友達”なんだ…。

それから…桜が咲いて、暖かくなる頃、

寂しくなると私はひとりぼっちで、桜の公園によく行く様になつた。そこはいつでも暖かい空氣や幸せそうな子供の声がしてた。何より、人に涙を見せて突き放されるのが怖かつたあの頃は、一人になる場所は必要だつたし、落ち着いた。でも寂しかつた…。

その時リュウタとは何とか縁が切れずに済んだけど、好きだつたバンドと、自分のバンドの解散、リュウタとの事…、大事な物が通り過ぎようとするやるせなさを知つた春の日、大事な物が離れて行く恐怖を感じたあの春以来、今でも私は桜を見ると無償に寂しい気持ちになる様になつてしまつた。

奇麗な花は短い命が終わると、バラバラになつて皆どつかに飛んで行つちゃうものなんだよね。

## 女子高生の賭け

4月になつて、クラスが変わると、もつひとつ一気に受験モードに突入していた。

とは言え、エスカレーター式に大学に上ががれるうちの高校の場合、勉強に励む人と、やる気のない人がパッククリと奇麗に別れる。

ミクは簡単に入れる専門学校に決めていた。

なんとなく付属の大学に行つても、やっぱり勉強には着いて行けそうになかつたし、昔から好きだつた絵が描きたくてデザインの専門を選んだのだ。

だから全く勉強なんてする気がなかつた。

そんなこんなで、成績別に別れる英語なんかのクラスもほとんどの年と同じ面子だつた。

（そこにサヤがはいつて来たのにはウケたけど！）でも何となく、将来に向けて勉強を頑張る子が増えて、そういう雰囲気にはやつぱり馴染めなかつた。

ますます学校がつまんなくなつていつたのは言つまでもない。

その頃からまた、中学の時の友達が無償に恋しくなつて、3年間同じクラスだつた“多香子”の家に居座る様になつた。

多香子は優しいし、付き合いが長いから甘えられる。

リュウタや大樹とももちろん知り合いだから、いちいち最初から説明しなくても、事の流れをだいたい把握してくれるし、何だか楽で、私は多香子には色々と相談できた。

でもやつぱり答えは出さずに、リュウタとはずるずるお友達のままメールしたり、遊んだりしていた。

「つてゆーかさあ、リュウタ彼女の事つぞがつてんなりせつせと乗  
り換えればいいじゃんね~。」

多香子がかつたるそーにリュウタん家を見上げる。

実は私達、ちょこちょこ訳もなくリュウタん家の近くでうろついて  
いるのだ。

（悪さしないストーカーって感じ？）

「だよねー、絶対あんな女より私が性格いいつつのーーー！」

「言える言える！ 本当ムカつくよね~！」

はあ。ため息が出てくる。半ストーカー的行動に加えて、会つた  
事もない彼女の批判をしてみたり…。その上、プリクラでチラつと  
見た限り、私なんかよりは結構かわいかつたから本当のところ、見  
た目の事はあんまり否定できなかつたんだけど…（死）

だけど近頃リュウタは彼女の愚痴を良くこぼす様になつた。（まあ、  
どうでもよくなつて、彼女の事聞いたりしたから、向こうも言える  
様になつたのかも知れないけど…。）リュウタの愚痴つて言つたら、  
まあ毎回似た様な感じ。

「俺の彼女さあ、とにかく束縛激しいんだよーメール返さなきや怒  
るし、電話なんかしょっちゅうかけてくるし、女のメモリーなんか  
見つかつたらどんな事になるかわかつたもんじやないぜ！！」

今日はまた一段とイライラしている様子のリュウタ。私は複雑な心  
境で話を聞く。

「でもさあ、そんなところが可愛い！！とか思つてんでしょう？ 女の  
メモリーないなんてあり得る？ 普通に不便じゃん！ 何だかんだ入れ  
てるんでしょ？ ならいいじゃん？」

「いや、本當にないよ。親戚の人くらいかな…」

リュウタがため息まじりに携帯を見る。

「じゃあさー、私にメールする時どうしてんの？」

「ん？ そりや暗記でしょ、暗記… いちいちアドレス打つんだよ…」

「え！そーなの……大変な事してんだね……」

と、言いながらそんなめんどくさい事までしてこのめんどくさがり屋が私にメールを打つてくれてるのかと思いつとちよつと期待してしまつたりする。（私バカ。）

「でもでもでもーー私もやつぱりアドレス入れてほ～し～い～！！！」

「お前アホかあ！そんな事したら殺されてしまつわー！」

リュウタの顔は本氣だ。どうやらマジで結構彼女は強いらしい…。「でも、まあ、確かにいちいち入力すんのめんどいしね、こうじょうー！」

リュウタが力チ力チ軽快な音を立てて携帯に何か打ち込んでいる。

「ほらね」

と画面を見せられると、そこには 店長 の文字が…。

そしてそこには私のメモリーがインプットされていた。

「う…これは名案なのかなあ… どうなの？大丈夫なわけ？」

リュウタはにっこり笑って

「大丈夫、大丈夫！あははは。」

とか得意そうに言つてゐる。でも私は本当にこの笑顔にすんんぐ～ぐ弱かつたから、

「解んないけど、いいんじやない。あんたがいいんなら。」

もう呆れて物も言えなかつた。

でもそんなところもちよつと、いや、かなり可愛いなあ～とか思つてしまつ自分だつた…。

そんなこんなで私とリュウタの関係は全然進展していなかつた…。大樹も多香子もちよつとあきれた様子だつた…。

私はその時やつぱり一番成績悪いクラスで、サヤや、見なれた面子と机を並べながら、窓の外をぼんやり眺めながら、自分の進路や、リュウタとの事を考えていた。

隣の教室からはカリカリとノートを取る音しか聞こえないって言つのに、このクラスはまるでお祭り騒ぎだ…。

「ミクーなんかしょぼいよ～、みかん食べよ～。

「あのさあ、なぜ授業中にみかんが…。」

「いいなあー サヤにもちょーだい」

おやつに化粧品に漫画…この教室はそーゆー物が飛び交つていた。でも、サヤは元々頭がいいし、菜穂や亜子達もちゃっかり上ランクのクラスだった。

その頃の私に取つて、本当は何が一番ヤバかったかって言つと、実は…。

「留年！！！！」

「そう、留年、今度夏前のテストで60点は取らないとその時点で結構ヤバいか。」

先生からはしつかり念を押されていたんだ…。最近の私はバンドに、バイトに、恋愛に…。

どれも大切で、一生懸命だつたけど、実際は絵に書いた様な遊びっぷりで、これじゃ進路が決まつても、卒業できなくなつちやう。その頃の私はすぐイライラしていた。

やりたい事と、やらなきやいけない事…。あまりにも食い違つていた。

その中で、私はバンドはもう組めないなあと思つた。

新しいバンドを立ち上げる事は大変な事だつたし、精神的にも今は新しい仲間を作る余裕はないと思つた…。

それから、ずっと続けて来たバイトも、とりあえず受験を言い訳にしばらく休む事にした…。

バイトの仲間は本当に家族みたいで心地良かつたけど、今はそれも気が乗らなかつた…。

大切な物は一つでいいと思つた。

リュウタを取るしかない。リュウタしかいらない…。

学校は何か頑張つて卒業したい！

だから、やりたい事諦める。でもリュウタだけは譲れない！！

本来ミクは、男の為に、何かを犠牲にしたり、他の物を大切にできない女は好きじゃ無かつた…。

男に依存して、裏切られたその後に、何も残らないのも解つていたから…。

ましてやリュウタの気まぐれな誘いを待つ為に、私はずっと大切にして来た事を手放そうとしてる…。

こんなでいいのかなあ…って何度も自分に問いかけるけど、やっぱり私の意志は堅かつた。

どんな事があつても今一番大切な物を必ず手にいれるんだ！！！

リュウタのくしゃくしゃのあの笑顔を自分だけの物にしたかったんだ…。

それから私は来る日も来る日も補習とリュウタからの連絡を待つ日々だつた。

リュウタはだいたい“彼女も友達も暇じゃない時”に私を呼んでるんだけど、

「バイトもやめたし暇になつた。」と言つと、その誘いは少しづつ増えて行つた。

【暇だ〜〜！】って入つて来て、

【じゃあ行つていい？】ってなぜかあたしが誘う形にさせるのは、狙つてゐるのかどうなのか、本当ズルイつて思うけど、そんな短いメ

ールさえうれしくて、私は何日も待つてしまうのだった。

最初は、浅田や孝介が一緒に事も多かつたけど、だんだん2人で会う日も増えて行つた……。

【今日うち来ていいよ。】

その日もまた短いメールで原付きを走らせてしまうミク。

彼の家の近くの駅に原付きをおいて、なんなく家族と顔を合わせない様に静かに一階に上がる。

リュウタの家は中学の時に出来たばかりのキレイな家で、木の香りや日射しの射し込む気持ちのいい家、階段には2匹のネコがいて、2階に上がってすぐの扉がリュウタの部屋……。

まだ彼女たった、あの頃のまま、  
壁を塗り替へ、リュウタが、

「来たよ。」って声をかけると、  
「よお。」って短い挨拶をして振り返る彼の笑顔は、大人びても見えるし、子供みたいにも見える。

細く白に透けた茶色の髪をなでられたらしいのにと思しながら、私もベッドに座るんだ。

幼い頃、わけも解らずこのベッドの上で、何度も唇を重ねた事、彼の白くて、細くて、筋肉質な腕に抱きしめられた事…今だつて忘れられない。

でも今は、リエウタには彼女がいるし、私はただの友達で、その関係が壊れてしまつたら、彼はきっと私を迷惑に思つし、こんな風に2人で会つたりしてくれない…。

だから私はいつもリュウタの体が触れない距離に座る。

リュウタも私を近くへ呼ぶ事はないし、どんなに2人でいても、キスをする事も、体を重ねる事もしなかった…。

皆はチャンスだ！って言つけど、私はそんな風に関係を終わらせて  
しまいたくなかった。

私なりに、この恋を大切に大切に守る手段だった。

時々リュウタは携帯が鳴つても出なくなつた。

彼女からだ…。

「あいつ、一回かけてくると長いから。」とか、

「別に好きかどうか解らない、喋ると喧嘩になるから出たくない。」

なんて言つてたけど、本当は私に気を使ってくれてるんじゃないかなで、都合のいい期待もしたけど、

時々リュウタは、「3人でつき合つてゆーのビーよ？仲良くなつたらあいつだつてそんなに怖いわけじゃないんだし」なんて「冗談」を言つたりした。

「名案！なんて言つわけ無いじゃん！本当バカだね～」

「やつぱ駄目？冗談冗談」なんて、無神経なのか、本当にバカなのか…。

でもこんな冗談だつて、笑い合つて言える事に価値を感じていたんだ…。

とにかく今は待つて、我慢して、最後に笑えればいい。

全てが賭けだつた…。

そんな私を菜穂が呼び出したのは、5月の良く晴れた朝だった…。

## あなたの知らない世界

その日は太陽がまぶしくて、もつ初夏の空気さえ感じられた。雨上がりの朝はとてもさわやか。

球技大会に向けて、校庭では生徒達がそれぞれ練習に励んでいる。ミクと菜穂は乾いたアスファルトを探して腰を下ろした。

いつも元気な菜穂が今日は少し憂鬱そうな表情を浮かべている。

「相談つて何？この前からつまってる年下君の事でしょ？」

「うん…実は、私、司くんに隠し事されてたつてゆうか…」

「隠し事？どんな？」

恋愛で悩んだ事なんてない。自分から振り回す事があつても、振り回される事なんてあんまりないって菜穂はいつも自信まんまんに笑つて話してたのに、こんな日はめずらしい。

私は菜穂の彼、“司くん”が浮気でもしてるんじゃないかな…なんて、瞬時に想像してしまった。

しかし…。事はもつと…。

笑える事だった…。

「実は…」

「うん…」

思わずつばを飲む。

最近司くんが日曜日も遊んでくれない事とか、拳動不振で何かを隠しているつぽい事とか、色々。菜穂は話し始めた。しかもその理由が…。

# 「は？宗教？」

思わず聞き返してしまった。

「せ、何かおかしいと思ってたんだよ、だつて日曜の朝は用事が  
あるから平日の夜しか会えないとか、お泊まりしても必ず朝、晩ト  
イレでこそこそ一人でなんか言ってたりするし、浮気じやないかつ  
て問いつめたら、日曜日はお祈りに行くから…とか言いだしてー！  
もう、引くよね、大ショックー

！」拳を握りしめる菜穂。

申し訳ないけれど、菜穂の自慢の年下彼氏がそんな事をやつてているとはちよつと、いや、かなりうけた。菜穂の彼、“同くん”背も高いし、顔も結構かつこよくて、何より今時のオシャレな男の子つて感じ。パツと見年下には見えないし、菜穂が自慢するのも無理ないなって思つてたのに…。

「ひつどーいーー!! クなら相談乗つてくれると思ったのにーーー。」「あはは、ごめん、ごめんね! あまりにも予想外だったからさあ、ちゃんと聞くからー」

それから菜穂と私は、その宗教について物について約1時間程話し合う事になつた。.

菜穂の話によれば、まず彼がその宗教に入ってしまったのは、どうやら変な先輩が原因で、初めはもちろん半信半疑だったけど、毎日とにかくお祈りを欠かさずやれば、近いうち必ず願いが叶うとか色々言われたり、そして何より特別な資金などもいらないって事から、おもしろ半分に手を出してしまつたらしく、今ではどっぷりはまつてしまつた様だ。

お金もかけず、信じてさえいれば、例え地震がきても絶対に助かるとか、逆にこのお祈りを知らない人やさぼつてしまつた人間は、不

幸になるとなるで言つてこなりじ。』

そして今ではすっかり信者の彼は、何とかして菜穂をそこへ連れて行こうとしているのだ。

「幸せになれる宗教だからこそ、菜穂と2人でやりたいんだ。」  
とまあ、こんな感じで言つているらしい…。

「で、菜穂も行くの？」

「まさか！そんなキモイ所どーして私が行かなきゃいけないの！？  
絶対嫌！…」

「でも、本当に、お金もかかってないならそんなに問題ないし、2人で通えば日曜日も一緒に過ごせるよ。」

「それはそうなんだけど…。」

「じゃあ、同くんと別れる？」

菜穂がぶんぶん首を横に振つた。何だかんだ言いながら一度つき合つたちやんとまじめに相手の事を好きになるといふがこの子のかわいことこうだなーと思う。

「よし、それならやつぱり一度見ておいでよ。やめさせることにしたつて、それが一体どんな物なのか見てみないとどうにもならないしね。」

「そつかあ…そうだ！じゃあさーミクも一緒に行つてよ」

「はあ？何でそうなる。」

「だつて何かやつぱりちょっとキモイとか思うし一人で行く勇気ないよ～。無料で幸せになれるんならあんたも損ないでしょ…！」

「そ、そーだけど…。」

「よし、決まり 同じで云えとくから日曜日空けといてよ^\_^  
菜穂の誘いについつい乗せられてしまつた…。

でもその時の私は、とても弱つてて、本当に先が見えなかつたから、今だったら笑つちゃうそんな宗教話にさえ、本当は少し期待してい

たのかもしれない。

得はしなくとも損はしないし、色々お願ひしてみようかな、なんて、実は内心興味しんしんだつた。

つて、事で早速次の日曜日、

宗教つて物を体験する事になつた私は、駅ビルの前で、2人を待つていた。

田舎から電車を乗り継いで1時間のこの町は、学校帰りには毎日のように、よく遊んでいたけど、休日は特に、ギターを引く人、踊る人、何かを売る人に、もちろん乗り継ぎでホームを行き交う人なんかで、ごつた返していた。

ミクは、休日のこの町が少し苦手だつた。

田舎者だし、あんまりお金もなかつたその頃の私は、洋服もそんなに持つてなかつたし、ブランド品も化粧品も、そんなに買えなかつたから、ひとたび制服を脱いでしまうと、この町の中で、自分が一番ショボイ小さな存在に思えて、時々、暗い気持ちになつてしまつのだ…。

劣等感…それはリュウタの彼女に対する感じている気持ちにも似ていると思つた。

しばらく待つていると、2人がやつて來た。

「ミクー、お待たせ 紹介するね、こちら彼氏の司くん。」

「初めまして、いつも菜穂がお世話になつてまーす！」くつたくのない笑顔で笑うかわいい男の子。プリクラなんかでいつも見てるけど、こうしてまじかに見ると、オシャレでお似合いの2人

。会話にぎこちなさもなくつて、自然な雰囲気でこの町の雰囲気に溶け込んでいる。

(いいなあ、うらやましいなーーー)

ミクはリュウタとつき合つていた遠い日の事を思い出していた。

私は始めから彼が自分とつき合ってくれるなんて思ってなかつたし、つき合つてからも、彼は、

スラッと背が高くて後輩からラブレターをもらつたりしていたし、私はチビで、顔も普通程度だし、隣に立つていいんだろうか？つていつも引け目を感じていたんだ。

今思うと、自分がどう見られてるかって事ばかり考えて、かんじんの彼との恋愛に没頭できなかつた様な氣もする…。本当に子供だった…。

（よーし、今日はそんな自分とおしゃばる為に祈るぞ…）何だかちょっとやる氣が湧いて来てしまつた。

そして、「ちょっと、ミク、解つてるの？私達、司を止める為に来たんだからね！」なんて、耳元で菜穂に叱られたけど、その後、菜穂の心をも、ゆるがす人物が現れる事となる…。

私達3人は、にぎわう駅から薄暗い路地に入ると、いくつかのプレハブ倉庫が並ぶ、あやしい細道を抜けて、集会場（？）を目指した。怖さと好奇心でドキドキする。こんなわけの解らない体験はなかなか無いだろう。

「ここだよ。」同くんの指さす先には、いかにも怪しい小さなビルが建つていた…。

「じゃあ、男子部とはまた別だから、2人はここで待つて。すぐリーダーの人が来るから。」そう言つと同くんはさつとどつかへ行つてしまつた。

ミクと菜穂は会話もなく立ち廻りしていた…。

（どーしよ、やつぱヤバいのかな？リーダーって何？どうせ頭ハゲた油臭いおっさんか、髪の毛ぼーぼーのデブのおばさんとか、とにかく怪しい人間にちがいはないんだろうなあ…。）

隣で菜穂も険しい顔をしている。たぶん今、私達の考えは同じ、心は一つなのだ。

と、その時だ……。

「はい あなた達ね、見学したいって言つて同くんのお友達は？」  
少しハスキーで甘つたるいかわいらしい声……。振り向くと、そこに立っていたのはバスでもテープでもない……。

「浜崎あゆみ……系……」

「そ、それだ！あゆだね、うん、間違いない……。」

女子部のリーダーは意外な事に、あゆ系の金髪美人だつたんだ……。しかもその後出て来た男子部のイケ面ワイルドリーダーとは超お似合い夫婦で、かつわいい娘さんまでいたのだ……！

「うそ、信じられない……。」菜穂とミクは顔を見合させた。

2人はここで、幸せを願つ物同士出会い、恋をして、人生最大の幸せな結婚をしたと言つ……。

その他にも、本当にお金がかからないって理由で、女子高生やら鼻ピアスのおにーちゃんやら意外な面子が勢ぞろいしていた……。

あっけにとられていた私達だつたけど、

「浜崎あゆみじゃやるつきやないでしょ。」

「そうだよね……、別に損するわけじゃないしね……。」

そうしてミクと菜穂は成り行きで宗教の信者になってしまった。

でも、やつぱりミクに取つては、そんな事簡単に信じれるわけなくて、暇潰しつつゆうか、昔女の方がよくやつてたおまじないみたいな感じで、気が紛れればいつかあ、くらいにしか思つていなかつた

んだけどね。

しかし、何かにすがっているうちは、何故だか“守られてる”様な気がする物で、お祈りをし始めてからの私は何かちょっと落ち着いていたし、明るく頑張れた。

そして一見どーでもよかつたその宗教のおかげなのかどうなのか（たぶん氣のせい）リュウタとの仲がやっと進展し始めたのは、偶然なのか、必然だったのか、本当にそのすぐ三日後のことだった…。

## おやすみを言つて。

最近のミクと菜穂の朝の会話は決まっていつ、

「ねえ、お祈りしてる（笑）？何かいい事あった？」

ミクは答える。

「まあね。ぼちぼちかな。」

実際、リュウタとの仲はやつぱりまだ“友達”だった…。

それでもおまじないの様に2人はそのおかしな宗教を何となく心中で信じていた。

そしてまた、その日もリュウタからの短いメールで、ミクは彼の家へと走る。

「もしもし、リュウタ？着いたよ？」

「うん、上がつて~」

氣怠そうな声、奴は決して玄関までお出迎えしてくれたりはしない。ミクはもう慣れっこだった。

そんな彼の態度をいちいち気にしていては身が持たないから。

いつもの様に2人は無意識に距離を取つてベットに座る。

TVを見たり、漫画を読んだり、一人で居ても一人でいてもどうちでもいいような時間を一緒に過ごすのだ。

時々リュウタはシャワーを浴びたりご飯を食べたりする。

彼の生活、彼の日常を見ていると、ミクはいつそうドキドキせられたけど、

彼につとつては何でもない事で、乱雑に髪を拭きながら、どうでもいい事をまたずつと話すのだった。

少なくとも、ミクにとつて、2人でいるのはそんなに窮屈な事ではなかった。

元々、彼の勝手な行動やそれでいて実は結構優しい所なんかがミクは好きだったから。

彼とは2年ぶりに再会したっていうのに、彼は基本的にあんまり変わっていない様な気がする。

違う学校に通つて、知らない友達を作り、どんなバイトしてるのか知らないし、色々な事が変わつているはずなのに、ミクは彼の“本質”を好きだと感じていたから、どんなに環境が変わつても、姿が変わつても、何度も巡り会つても彼を好きになる様な気さえしていた。

ミクは自分の立場もちゃんとわきまえているつもりだった。  
元カノだからと大きい態度は取れない、あくまで自分だけの勝手な片思いだという事もちゃんと知つていた。

でも、最近どーしても気になる事が一点…。

ピロピロ~

2人でTVを見ていると、聞き慣れた着メロが鳴る。リュウタのだ。  
「また鳴つてるよ?出れば?」  
「いいや、メールだから。」リュウタは携帯を枕の下に放り込む。  
「俺、あんまりメールとかしない派だから。それよりお茶でも飲む?」そう言うとリュウタはさつさとキッチンに逃げて行つてしまつた。

絶対、絶対決まつて彼女のメールなのだ。

ちなみに私は、恋人の携帯をいちいちチェックする人が嫌い。  
つき合つてからつてプライベートを干渉する人も嫌い。  
細かい事を詮索するのもされるのも束縛も大嫌い!!!

だからいちいち携帯を鳴らしまくるこの彼女の事がすっごく気に入らなかつた。

まあ、カンのいい彼女の事だから、元カノが家に居るとは思わなく  
ても何かおかしいとは思つてはいるのかもしれない‥。

実際私は、そーゆう女が嫌いと言つよりも、リュウタの彼女がそん  
な感じだつたから、ただ同じ様な女に見られたくなつただけな  
かもしれないけど‥。

リュウタの携帯がまた鳴る。

今度は着信だ。

リュウタの居ない部屋で、彼女の着メロがいつもより一層うるさく  
聞こえた。

（やつべー、超むかつく‥。）

どつちかつて言えば悪いのは私の方なんだけどね。

こんな時女なんて本當都合のいい生き物だなうなんて考えながらも、  
携帯が鳴りやむと、急に部屋が静かになつて、自分の心臓の音が大  
きくなつていてる気がした。

何だかんだ言つてもミクのストレスはピークに達していたんだ。

耳障りな携帯の音がもう一回鳴つたら、ミクは絶対冷静ではいられ  
ない。

（携帯力チ割つてやりたい、駄目だ今日はもう帰ろうかな‥。）

荷物を持って立ち上がつた時だ、ベットの下に何か落ちているのが  
目に止まつた。

手に取ると、それは、パンダのぬいぐるみだつた。

（コレつてもしかして‥。）ミクの記憶の回路が繋がる。  
そのパンダはミクにとつてとても大切な物だつた。

3年前のある日、リュウタとミクは動物園に出かけたんだ。

その動物園には小さな遊園地も付いてて、5分もあれば一周しちゃ

う様な観覧車なんかがあるんだけど、とても幼かった私は、その観覧車のてっぺんでチュウする！…！って大騒ぎして（バカ）、もちろんリュウタはそーゆうのバカにするし、こっちも全然期待してなかつたんだけど、実際てっぺんまで来た時、リュウタはチュウをしてくれた…。

私は大はしゃぎで、帰りにパンダのぬいぐるみまで買つてもらつて、そんな恋人っぽい事をしてもらうのつてとても珍しかつたから、私は本当に嬉しくつて、その年のリュウタの誕生日に、時計と、同じパンダを買つてあげたんだっけ…。

ミクはそのパンダがまだリュウタの家にあるなんて想像もしてなかつた。

少し薄汚れてしまつたそのぬいぐみは時の流れを感じさせて、ミクを悲しい気持ちにさせたけど、思えばこの部屋には、私のあげた物がいくつか紛れ込んでいる。

たぶんリュウタは別れたからつていちゃいちその彼女の物を、処分する様なタイプじやないのだわつ。

別に想い出に浸るとかそーゆーんじやなくて、ただ忘れてるんだろう…私の中では大切にしまつてある沢山の想い出も、リュウタにとつては何でもない事なんだらうな…。

ミクは荷物を下ろすと、ドアに耳を当てた。

静かな部屋の中でかすかに彼の足音と食器のぶつかる音が聞こえる。彼はまだキッチンだ。

私は本当は別に聞き分けがいいわけでも、いい子でも何でもないただの勝手な女でしかなかつた。

本当は彼女の事も、わけの解らない“友達”つて関係にもほとほと疲れきつていた。

リュウタの携帯に手を伸ばす。

彼の携帯は無防備にもロックもかけられていない。

私の知らない彼の日常を本当は知りたくて仕方なかつた。

私はその束縛のひどい彼女と何も変わらない。

メールフォルダの中は本当に彼女のメール以外何もなかつた。他の女のメールも私のメールさえも…。

（彼女、“千理”って言つんだ…。）

私は震える手で、千理のメールを開いた。

でもそこには意外な事が書かれていたんだ…。

（はあ？なんじゃこりや？？これじゃまるで…。）

そこに書かれていたのはこんな感じ…。

【リュウタくん、どーして電話もメールも返してくれないの？一体なんな訳？何してんの？最近おやすみのメールもくれないよね？おやすみだけは毎日言つてついていたじゃん！…！】

私は何だかちょっとホッとしていた。

だつて何かコレジやまるで、2人がうまくいってないみたいじやない。

（つてゆーか、毎日「おやすみ」なんて、そんなめんぢくさい事奴がしているのか…。

何かやつぱり彼も変わったのかな？私がつき合つて頃つてお互いつつぱり彼も変わったのかな？私がつき合つて頃つてお互い携帯なかつたからなあ…。）

ちょっと嬉しくてニヤついてると、彼がキッチンから戻つて來た。

「何お前一人でニヤニヤしてんの？キモイよ」

「別に？それよりコレまた鳴りましたけど？」

ストラップをつまんでいる私を見て、一瞬リュウタの顔がマジにな

る。

「うわっ、お前いつの間に！…返せって！」

「やーだね！」携帯を開くとリュウタが慌てて飛びついて来た。

「よせって、離せって！」

携帯を握る私の手の上に大きなリュウタの手が重なる…。

ベットの上でリュウタがのしかかってきて、ミクは一人で勝手にドキドキしていた。

「お前って奴は油断も隙もねーんだから…！」

携帯が手の中に戻ると、リュウタは安心したつて顔で、また私と距離を取つて座る。

リュウタの体が離れるとミクはちょっとがっかりした。

（あーあ、やつちやつたつていいのに…。）

何かちょっと自分つてずるいし最低だなと思つたけど、でも何かどーでもいいつて感じだつた。

「ねえ、コレさあ覚えてる？」ミクは今度はパンダをつまんだ。  
「あー昔お前が置いてつたやつだろ？まだあつたんだ。欲しいなら持つてつていいけど？」

「いいの、ココに置いてきたいの。」

リュウタはふーん、と答えた。

こいつは私や彼女の気持ちがどこまで理解できるんだろう？

最も私はリュウタの気持ちなんて全然解らないし、彼女の気持ちなんて知りたくもないけど…。

「そろそろ帰ろうかなあ。」

「あ、じゃあ俺も途中まで乗せてつて。」

「いいよ。」

2人は原付きで外に出た。

夜だつて言うのに蒸し暑くて、2人乗りしてると、少し汗ばんだりユウタの体温で自分も熱くなる。でもそれが良かつた。

ユウタの体温で自分も熱くなる。でもそれが良かつた。

私は原付きで走つてゐる間も少しでも話がしたくて大きな声でしゃべつていだ。

「ばか、それ俺だわー！お前が乙女チックに横座りで自転車乗つたからやめろって言つたんだよー！」

二十一

私は彼が覚えててくれて嬉しいと思うた

「いやあ、私の名前「川奈ー」で言える? 漢字で書ける? 読生曰く  
える? 家どこか解る? ?」

「お前俺をなめてんのかよ、そこまで記憶力悪くなしし！！！」

「可がおかしいよ？」

「別に、  
気にしないで！」

( もう戻せない。 )

ミクはリュウタの事がどんどん好きになつていた。

そしてその日の夜、リュウタからまた短いメールが届いたんだ。

【 もやさん。】 って。

驚いた：意味は解なんないけど、嬉しかった。

三ヶ所短いメールを返した。

【大好きだよ。おやすみ。】

言つてはいけないと思っていた。でも入れたかった。

それから次の日もその次の日も彼からの【おやすみ】は届いたのだった。

その日私は多香子の家に居た。

その日…と書つか、最近よく多香子の家に来ていた。  
見て…」「レ…」

ミクは自分の携帯を多香子に見せた。

リュウタからの【おやすみ】は昨日も入つて來た。  
「す」「いじやん！あいつがこんな物入れてくるなんて笑える！でも  
す」「いじやん…」

多香子はリュウタの事知つてゐるから、良かつたねつて言つてくれる。  
ミクはそれがとても嬉しかつた。

最も他の友達に見せたら、なんて言つだらう？

彼女がいるのにこんな物入れてくる奴をバカだと思つだらうか…。  
それとも私の事を可愛そつに思つだらうか…。ミクは自信がなかつ  
た。

それからその【おやすみ】は日に日に変わつて來ていた。  
字に色が付いていたり、点滅したり、絵文字が付いたり、リュウタ  
の遊びの一つ一つに期待は高鳴つていつた。

昨日のはつに語尾にハートマークが付いていた。  
何がしたいのかはさっぱり謎だつたけど、そーゆう変化の一つ一つ  
にミクは振り回されていたんだ。

「やつぱり、お祈りしたかいがあつたー」

「まだそんな事言つてるの？バカだなあ。あんた頑張つて來たじや  
ない。」

多香子は優しいなあ…でもやつぱりミクはお祈りのせいだと思つて  
していた。

何かのおかげだつて思つるのは気持ちが楽だつた。

それを続けてさえいれば、リュウタとの関係も切れない様な気がするから。

実際はそんな単純な事じやないんだろうけど…。

その頃からミクは聞く音楽の趣味も変わつて来ていた。

恋愛とは不思議な物で、自分の趣味や物の好みまで左右してしまつのだ。

ミクは昔から元気でノリのいい歌が好きで、バンド時代もずっと、ジユディマリやヒスブルの歌を歌つたり、自分で作る歌もそれに近かつた。

その頃の女子高生つて言つたら、皆やつぱりあゆとか聞いてて、「あゆの歌つて歌詞がいいよねー」なんて話してたけど、ミクにはよくわからなかつた。

切ないとか、解かない程子供だつたんだ。

「最近ああ、あゆとか、愛内里菜とか、古いけど、華原朋美とか聞くよー。」

「あんたが? ビーしたの?」多香子が笑つて言つた。

自分にも解んないけど、その頃から、今までよく解んないと思つて、いた歌の歌詞とかに共感を覚える様になつたんだ。  
何か女の子が心の中でぎりぎりの所に居る様な歌に気持ちが重なつていた。

当時、私が好きだつた歌は皆、どことなく辛くてもちゃんと戦おうとしてる女の子の歌ばかりだ。  
たぶんそーゆう風になりたい、ならなきやいけないと思つていた。

【誰にも言えない、誰かに言いたい、あの人が誰より大切つて。】

【あの人じゃなれば、駄目だと言い切れる。それは君だと気付く

時、昔どんな悲しい別れをした人も、忘れるものだと氣付いたよ、  
後にはもう引けない… for your love この手がもし  
君から離れてしまつたなら、解らない何処に行けばいいのかさえ、  
何一つとも、これ以上この世界に守りたい物なんてないのに。明日  
は私の中に優しく強さ、ありたい save me】

【一晩が終わるやるせなさと、そして一日が始まる不安との挟間で、  
一瞬よぎる優しさに、君と感じ合いたいと甘い夢を見てしまう。】

【あなたのイニシャル、砂場に書いて、また消して、時間のネジ回  
して、次の約束がノートに書いてあるから、それを見て、それを抱  
いて今日はいい夢見よ…。】とか…。

柄にもなくそーゅうのばっかりギャルとかに借りて聞きあさつてし  
まう自分。

あー恋愛、いや、恋とか片思いとか、昔の彼とか…問題があつて、  
ハードルが高い程、私はそのアリ地獄の様な呪縛の中に吸い込まれ  
て行つてしまつ。

こんなに誰かを好きだと思い込んで、こんなにコントロールが効か  
なくなる事が私の一生の中にこれから先あるんだろうか？  
彼の気持ちも解らないままこんなに彼の事を好きになつていいいんだ  
らうか？

だいたいもう既に一度終わった2人がもう一度なんてあるんだろう  
か？

ミクの頭の中はリュウタの事でいっぱいだった。  
次のテストを落とすと留年する…。

でも勉強の事とか嫌な事は全部忘れていたかった。  
結局ね、若かつたんだ…あの頃。

ミクは今でも思うのです。

とにかく若かった。頑張れば何でも手に入ると思っていたし、何でもかんでも根性で何とかしようと想っていたし、

辛いけど、若いっていいなって思つたミクなのでした。。

（まだまだ次回へ続きます。）

ゆづくつと、確実にミクとリュウタの関係は変わつて来ていた。

季節はもつ、暑さも本番にさしかかる7月の初旬の事…。

私は留年するかもしれない程勉強してなかつた。する氣もない。リュウタからの短い【おやすみ】と、少ない誘いだけが、心の支えそのものだ。

ある日、担任の小森先生から呼び出される…。

小森はとても熱血な教師だ。

リュウタの話をした事…ミクは後悔した…。

「ミク、お前本当にやる気ないな…次のテスト頼むよ。絶対60点以上取つてね。」

小森は頭を抱えてミクを困つた顔で見る…。

「解つてますよ、ちゃんと卒業するから今は放つとして下せよ。」

「

いつもの様に聞き流す。

「お前わあ、もしかしてまだあの元彼と関わつてんのか?やめた方がいいいぞー。恋なんてさあ、一瞬の事じゃん?お前も解つてんだろ?…どうしてうつ見返りのない恋に走るのかなー。」

いつもの説教が始まつた…。

去年までの小森はこんな事言つ人じゃなかつたのにな。

先生も応援してる…なんてはしゃいでたくせに、担任ともなると、

その子の進路や態度が自分への評価へと繋がるから…。大人も大変らしい。

「先生には解らないよ…。今私達の目の前にある大切な物が何かな  
んて…。」

私はそれだけ言うとさつさと荷物をまとめて教室を出る。  
だつて今日もリュウタと遊ぶ約束をしてるんだもん…。

その頃の私にはそれが全てだった。

数少ないリュウタからの誘いを断るのは絶対、絶対できなかつた…。

でも最近のリュウタの態度、今までの“友達だから”つてゆうのと  
はまた少し違う氣もするんだ。

だって、めんどくさがりのリュウタが興味ない女の子に毎日メール  
を入れたりするわけないもん。

少しづつだけど、リュウタも私を意識し始めている氣がする…。

とにかく今は誰にも邪魔されたくない、口出ししてほしくなかつた。

外を見ると、小雨がパラついていた。

でもリュウタと会える…私は気にせず駅に向かつた。

駅に着くと、友達の傘に入れてもらいながら、私を待つリュウタが  
見えた。

私が声をかけると、小走りに近付いてくる。

「今日俺が運転手してやるよー。」

無邪気に笑う彼が今日も愛しい。

「やだ！あんた絶対運転荒いもん！怖い！」

そんな事を言いながら、いつものように平然を装つんだ。

「バーカ。俺中免取つてんだぞ？お前より上だろーが、ほらビナー！お前は後ろだ！」

私は無理矢理後ろに乗せられて、あーでもないーーでもないってしばらくもめたりして…。

本当はね、こんな時間がめちゃくちゃ好きだつたりする。

そんなやり取りを見ていたリュウタの友達に「それ、彼女？」なんて聞かれるとい、

「違うよ。」って2人揃つて返事をするけど、何となくこやけてしまう自分を隠すんだ。

夏とは言え、パラパラと小雨が体に当たるとも寒い日だった。リュウタの運転はやっぱり荒くて乗り心地は最悪。

それでもリュウタの背中は大きくて、暖かいから、その田も私のドキドキは止まらなかつた。

こんな時決まって考えるのは一つ。  
もう死んでもいいかな…なんて。

家に着くと、わっかくコユウタはお田舎でのパソコンで作業を始めた。

たいくつそうに覗き込んでいると、

「もうちよつとー」なんて甘えて言つて来る。

私はこの笑顔にもわがままなところもすこしあへじく弱かつた。

（かわいいな…）

「ねえ、今日この後用事あるの？ないならもうくつこしてつよ。どーせ誰もいないから。」

「

「うん、別に用ないし俺も暇だからいいよ。」

それからリュウタの用が済むと私の部屋で、またたわいもない話をした。

最近の学校の事とかビーでもいいTVの話とか、

いつもの様に、お互いに無意識に距離を取つて…。

でも私はそんな時間さえも幸せだと思つていた。

完全に彼に依存し始めていた。

もつと近くに、せめて手が触れられるくらい近くに行きたい…。

ミクの欲求はどんどん膨らんでいた。

これ以上気持ちを口に出さずにいたれなかつたんだ…。

「ねえ、彼女とまだなつてるの？何かいつも電話とか出ないけどうまくいってないの？」

リュウタの顔が少しわざつた…。

雨で薄暗いせいか…部屋の空気が一瞬で凍り付いた気がした。

リュウタは言葉を選ぶ様にぼそぼそと答える。

「別に…。付き合は長こと近くにいるのが当たり前つて感じになるじゃん？嫌いってわけじゃないけど、恋愛感情があるのかつて聞かれたらちょっと解なんくなつてるつて気もするけど…。ビーだろう。

」

「そつか…。」

予想通りのあいまいな答え、リュウタは気持ちを隠すのが上手かつた。

あんなに詮索しないつて決めていたのに、やつぱり人間なんてわがままで、我慢や思いやりなんて所詮奇麗」とのままじじだ。私もそんな女の一人、リュウタの気持ちが欲しかった、愛されたかった。

「でも彼女と別れようとかは思わないんでしょ？？」

「…」

リュウタの視線が私をすり抜けた。  
やつぱりまだ聞いてはいけない事なのかな…。

雨の音がいつそう強くなる。

それでも私の心臓の音は一層大きくなっているに違いない。

リュウタが好きなんだよ。  
解つて…。

「あんた、あたしが彼女の事全然気にしてないとでも思つたのー？  
好きなんだから気になつちゃうに決まつてんじやんーでも別に責めたんじやないよ？聞いただけだよー！怒んないでよーーー！」

聞会話の流れが何だか変になる。  
彼の顔がまっすぐ見れなくなってきた…。

リュウタは少し驚いた様な顔で  
「マジで…？」とつぶやく。

その表情は少し照れた様にも取れるし、困った様にも見えた。

彼の心がどんどん知りたくなる。  
やっぱり自分が想う様に想われたい。

もうひとりぼっちは嫌だつたんだ…。

「あたしが好きつて言つてゐるの『冗談だ』でも思つてたわけ?」

『冗談っぽく聞いてみた。

リュウタは私の悲しそうな顔を覗き込んで、機嫌をとる様に言つた。

「まさか…そんな事ねーよ。」

リュウタもぎこちない笑顔を浮かべる。  
でもどことなく私の顔色を伺つてゐみたいだつた。

雨の音が一層強くなる。

リュウタの表情がまじめに見える。  
もちろん私はそれを見逃さない。

いつになく真剣な表情の彼。

私もつられてマジになる…。

さつきまでおちやらけていた2人。  
ベットの上で、少しだけリュウタに近付くと、

2人の視線がぶつかつた…。

好き…。

ドキドキして、熱くなつた…。

彼から視線がそらせなくなつた。

リュウタもきつと氣付いてゐる。

私はもう彼の事しか考えられなくなつていた。

早く氣が付いて…。

リュウタは頭を抱えながらはぐらかすみたいに笑つて言つた。

「いつも見えても俺だつてねー、結構悩んだりしてるんだからー。」

そう言つて田をそらすと、一瞬困つた様な顔をする。でもおちやらけた感じじやない。

「ミク…。」

リュウタが小さくつぶやく様に名前を呼んだ。

リュウタの口元がゆづくつ動く…。

“彼女が好きだ”とか“ごめん”なんて言葉だつたらどうすればいい?

私は必死に笑顔を作る。

泣き出しあつだつた。

「ちよつと困つた? そんなマジな顔しないでよ、冗談だよー。リュウタが彼女好きだつて事もちゃんと解つてるし、リュウタが私を好きじゃなくてもいいの、ちゃんと解つてるんだからー。」

めいこつぱーおどけて見せぬ。

だつて困らせたいわけじゃないんだもん…。

ただ、彼を好きなんだ。

別に彼と彼女をめちゃくちゃにしたいわけでもないんだよ。  
本当に本当に、ただ、一秒でも長く一緒にいて、一ミリでも距離を  
縮めたいだけ。

でも、時々ミクはこんな自分をはがゆく思つ。  
奇麗事ばかり並べてる。

2人を壊すのは悪い事、でも自分も好かれたいなんて、自分でもあ  
きれる程、偽善者でずるい生き物だ。  
自己嫌悪を感じる…。

でもそんな風にしか彼を好きでいられなかつた。

彼には彼女がいる。

じゃあ、私は何だろ？

彼の口からどんな言葉が出るか予想もできなかつた。  
急に怖くなる。

彼の口から改めて“友達”とは聞きたくないと思つた。  
ミクはベットから立ち上がるつとした。

…と、その時…。

グイっ！…！

「つあ…！」

強い力でベットに戻される。

リュウタの大きな手が、私の腕をしっかりと掴んだ。

…何？

私は思った。

リュウタの中の答えなのかな？

縁を切りたい？

それとも、このまま良き友達で？

リュウタは彼女と別れる気ないし、私を好きなはずじゃない。  
ミクは心の奥で小さな決心をした。

友達って言われたらもう少し頑張ろつ…。縁を切るって言つなら  
ちゃんと…アキラメナクチャ。

リュウタがミクに少し近付いて、2人の視線が重ると、  
治まった熱が、また体中に広がってきて緊張した…。  
ミクの心臓はドキドキして、爆発寸前だ。  
腕を掴まただけでも興奮する。  
もう冷静でいられない。

いつもより少しまじめなリュウタの顔がそこにある。  
いつも距離を取っていたリュウタの腕が、ミクの腕をしっかりと掴んでいる。

お願ひ…縁を切るなんて言わないで。

緊張が走る。

リュウタが小さな声でつぶやいた。

「…そんな事ねえよ、好きだし。」

「え…。」

一瞬の事だった…。

「嘘だ…。」

「嘘じやないよ。」

信じじられなかつた。  
頭が真つ白になる。

モウシンテモイイ…。  
またそつ  
思つた。

私は思つた。

この恋が終わってしまったのも、いつか他の誰かと恋をしてても、おば  
ーちゃんになつたって、  
今田の事一生忘れないだろ?つなつて。

## メール

突然の事。

「でも私は嬉しかった。

だつてずっとその一言が聞きたかつたんだもん。

リュウタはその日ミクを好きだと黙つてくれた。

彼の単なる気まぐれかもしれないし、

私の中の好きって気持ちとはもつと違つ意味だらうけど……。

だつて“人は100人100通り……”

だからたつた一言の「好き」って気持ちを皆が皆同じ意味で使つて  
るわけじゃない。

夜も眠れないくらいリュウタの事を考えてるミクとは違つ。  
うまく言えないけど、リュウタの言つてくれた好きって気持ちは、  
一緒に居て楽しいとか、好きって言つてくれたからとか、  
つまりまだ、ミクを気に入つてるつて程度なんだつてちゃんと解つ  
ていた。

それでも、照れ笑いを浮かべる彼の態度は、やっぱり今までとは違  
うから、

私は満たされた気持ちでいっぱいになれたんだ。

「ねえ、雨ひどくなるといけないから、もう帰るよ。送つて。」「

リュウタはさつさと帰る用意を始めた。  
なんだかごまかされた感じだったけど、たぶん彼なりの照れ隠しだ  
った。

「うん。解った。」

ミクもベットから立ち上がった。

もつと一緒にいたい…。

そんな気持ちでいっぱいだった。  
でも、この後また彼女の話を聞くのは嫌だと思つた。  
今はただ、余韻に浸つていたかつたから、私もすぐにリュウタを送  
る事にした。

雨はひどい音を立て、激しさを増していた。  
リュウタはミクにくつついで、

「超寒いーーー死んじゃうつてーー」と叫んでた。

こんな風に2人の距離をくつづけてくれる雨ならこりがりだつて平氣  
だつた。

家に帰つた頃、びしょぬれの体を暖めていると、リュウタからのメ  
ールが届いた。

【雨、大丈夫だつた?】めんな。

彼の優しい言葉にまたドキついた。

びつじて彼はこんなに私の心を知つてゐるんだら…。  
彼の行動や、言葉は全部ミクの心を持つて行つた…。

好きつて気持ちがどんどん増加していくのが解る。

リュウタはする。

いじわるな言葉や優しい言葉で、私を振り回して、焼きもちを焼かせて、いつもミクの頭の中を占拠する。じれったい態度は、ますますミクを夢中にさせたし、何よりそれを天然でやつちやう彼の事を私は憎めなかつた……。

もつと私を好きになつて……。

あいまいな気持ちじゃなくて、ちゃんと私を見て……。

彼女と重ねないで……私だけを好きになつてほしい。

悔しいけど、私はしばらく“待つ”事にした。

リュウタがいつか彼女と別れて、私と同じ気持ちで、「好き」って言つてくれる日を……。

もう後には戻れないって確信した。

その日も【おやすみ】のメールは來たし、

数日後も普通に2人で遊んだ。

変わらない態度、

いつもの何でもない会話と時間。

何も変わらない2人の関係。

でも、私は期待していた。

そのうち彼女の事が頭からどんどん消えて行つた。もう考えなくなつたんだ。

側で見てるわけじゃないから、2人の絆の深さを想像仕切れなかつた。

いや、考えるとどんどん悪い風にしか考えれなくなるから、彼女の事、もう知りたくないなかつたし、忘れたかつたんだ…。

現実逃避に都合のいい期待感。

周りが見えなくなつて一人よがりになる。

忘れちゃいけない事沢山あつたはずなのに、

夢中になるにつれて、ミクは大事な事をどんどん忘れていった。

そして私はある日最大のミスをおかした。

最初で最後…。

ミクからリュウタへの初めてのメールだつた。

【今何してんの?】

そう…たつたこれだけ。

その日リュウタは「今日は学校ないし彼女とも会わないから家でのんびり過ごす。」なんて

言つてた。

私は放課後ちょうど予定がなくなつて暇だつた。

すかさずリュウタを思い出してメールしちゃつたんだ。

でも戻つて来たメールを見て血の気が引いた…。

だつて…。

【誰ですか?】

それを見て、私は急に我に返つた。

(コレ、リュウタじゃない…。)

そう、それは最も恐れていた存在…。  
彼女の千理ちゃんに間違いない。

【間違えました。】

それからメールは来なかつた。  
リュウタに夜電話で聞くと、

「そんなの聞いてないし、お前からの受信も送信も履歴ないよ?…」  
と驚いていた。

黙り込む私に対し彼は結構ノーハンタに構えて言つた。

「あいつは怪しいと思つたら問いつめるはずだから、本当に間違いか迷惑メールだと思つて消したんだろ? 勝手に見たのバレナイ為に消しただけだよ。大丈夫だつて!」

リュウタはあんまり気にしていなかつた。

「そうかなあ…。」

「たぶんそうだよ。気にすんなつて。良くあるんだつて勝手に携帯見るからね~あいつ。」

「勝手にメールしてごめん。」

「いいよ…もう。」

私はリュウタに怒られなかつた事でホッとした。  
でも、何だかリュウタが彼女の事を何でも知つてるつて口調だつた  
から悲しくなつた。

今更だし当たり前だけ…。

でも本当はリュウタもミクもまだ彼女の事良く解つてなかつたのか  
もしれない。

「好き」は100人100通り。

私がリュウタの気持ちが解らなくて、リュウタが私の気持ちを理解  
できぬように、

私達も彼女の事、良く解つてなかつたんだ。

その後、忘れた頃にそのメールが大変な事を引き起こす。

ミクもリュウタも、まだそれに気づかづにいた。

## 心に広がる魔物

遂に事件は起こつた……。

ミクの頭は後悔でいっぱいだった。  
よくある話、後の祭りってやつ。

あの時あんな態度取らなきゃ、あんな事いわなきゃ、

あんな物見なければ……！――！

やつ、それは忘れもしない7月のある暑い日の事。

学校では菜穂がまた騒いでいた。

「あの宗教ぜつてーインチキ！――！」

いつになく取り乱す菜穂。

それをなだめる亜子達……。

聞けば、司くんが宗教にハマリ過ぎてトラブルを起こしたらしく……。  
優しかった幹部の人達もすっかり態度が変わって、  
今となつてはタチの悪い取り立て屋の様な物だった。

「もーあの人達の事は忘れなさい！幸せはそんなんじゃ手に入らないんだから。」

亜子の意見はもっともだった。

何かにすがつてないとやつてられない私達……。  
別にマジだったわけじゃない。

ただ、なんとなく頑張れない時、勇気をくれる魔法の様なおまじないの呪文だった。

あーあ、やっぱ世の中つてつまらないかない。

菜穂も私も少し凹んだ。

根拠のない“大丈夫”って気持ちはもつすっかりなくなっていた。  
最近は補習ばかりだし、暑いし、何かかつたるい時期だった。

その夜リュウタからの久しぶりの電話が来る。  
でも内容を聞いてまた凹む。

「明日、彼女がうちに来るって聞かないんだ。この前のメールの件  
もあるし、気つけてな。」

…。

（はいはい、解ったよ。）

わかつちゃいるけど、ちょっと寂しい気分になる。  
所詮、私はリュウタにとつての友達でしかないって思い知らされる。  
変だよね、2人は恋人同士なんだから、家に来たつてどこで一緒に  
居たつて普通なのに、  
ちゃんと解つてること、  
なんだろう？

リュウタの口からあらためて言われると急に彼女の事が リアル  
に気になつた。

（彼女とリュウタ、どんな時間を過ごすのかな？）

こんな時の想像は良くない事ばかりが浮かぶ。  
友達と彼女の違い、リュウタもきっとちゃんとわかつてゐる。  
友達の私とはタマにメールしたり、何でもない時間を過ごす。  
彼女とはきつと…。

次の日私は何となく落ち着かなくて、やつぱりうわの空だった。

あの部屋にはベットとTVしかないし、やつぱり今頃2人はキスしたり抱き合つたしてるのかな？

私の触れられない彼の体に、千理は簡単に触れて、自分の物だと確認するんだろうな。

気になつて仕方がなかつた。

久しぶりに大樹に電話して、何となくもやもやを打ち明ける。

「確かに、気になるけど、当たり前の事じやん。今更気にするなよ。」

大樹にさらりと言われた。

「うん。」

それから何となく冴えない私を大樹が励ましてくれた。

「でも、リュウタはミクとつき合いたいって言つてたよ。期待しない方がいいとは思つけど、いい方向向かつてんじやないの？」

「それ、リュウタが言つたの？」

「うん、だから頑張れ。」

少し励まされた。

もちろんそんなの期待しちゃ駄目つて解つてる。

でも彼を待つしかないし、こんな事はこれから沢山慣れて行かなきゃつて思つた。

でもやつぱりその夜はなかなか寝付けずにいた。

毎日来ていた「おやすみ」のメールが来なかつたから……。

ミクの胸に不安な影が広がる。

何でもないリュウタと彼女の一日が、

何だか特別な日に思えた。

そして次の日また見ちゃったんだ…。

リュウタと彼女のメール。

やめとけばいいのに…なんてバカなんだろ？

ミクの心を汚染する嫉妬と言つ魔物。

あの時あんな事言わなければ、  
あんな物見なければ…。

ミクの頭にハツキリと芽生え始めた気持ち。  
せめて“浮気相手”くらいにはなりたいよ…。  
あまりにも切なくてはちきれそつた願いだった。

ミクの心は揺れていた。

時計の針は狂い出している。

もつ昔には戻れないの？

## 心に広がる魔物（後書き）

ミクの運営するサイトです。ここから小説と曰ひ  
がみれます PCで見てね http://www.  
p-one/user/pandasexy/  
rak1.jp

次の日リュウタの部屋はやっぱり何かが違っていた。

片付けられた机、キレイに並べられた雑誌に、何となべりぱりぱりしたベット周り。

それからTVの上に何故かハート形のプレゼントの箱??が飾られて…。

あきらかに彼女の空気が漂つてゐる…。

私のパンダのぬいぐるみもいつのまにかクローゼットに戻つてしまつてるし。

(なーんか嫌な気分！――)

もちろん文句は言えない。

彼女が家に来て掃除したからって何にも問題ないし普通だし。でも何となくベットには目がいつてしまつた…。

2人はこのベッドで昨日、どんな風に何をしてたんだらつ…。

気になる――――

リュウタの唇の感触や、華奢な体を何となくだけずっと覚えてた私は、何となくリアルな妄想が頭に広がつてしまつた。

もちろん口出しえきる立場ではないんだけど、やっぱり彼女の存在は妬ましい。

私にそんな権利はもちろんないんだけどね。

そして、人の気なんて知つてか知らずか、（たぶん知らない。）リュウタもまた今日は一段とおしゃべりだ。

「彼女が来てもする事なんて特にないしさあ、掃除とか始めたら何か全部やりたくなっちゃて。」

私はいかにも興味なさげに「ふーん。」と答えた。

「ほら！」

彼はＴＶの台上に足をかけると、身軽にエアコンに手をかけて、「こんな所までね。」

ピカピカのフィルターを見せていつも笑顔を浮かべていた。

「本當だ。」

確かに彼女の仕業ではなさそうだ。

でも何かそんな会話をしている自分達がちょっと間抜けに思えた。

何かイライラする……。」の状況……。

なぜかつてやつぱり、ハートのプレゼント箱や、おやすみのメールがなかつた事や、それからそんな細かい事が気になる自分や、文句を言えないこの立場や……。

うん、色々ある。

それにやつぱり彼女が久々に来て、そんな状況なはずがないと思つていたからかな。  
別にいいんだよ。

だつて私はそんな事承知で今日も来ているんだもん。

だけど、「掃除してて……」なんてずっと話してる彼の態度も何だか腹が立つ。

もがりん「昨日エッチしてたらさあ、なんて普通に話されたら気分悪いし、自分もそんな事聞きたくないんだけど…。

でもこんな会話って（なめてんの？）なんて思ひやう時もある。もちろん口には出せなかつたけど。

それから、彼はしぶりへ“昨日は大してやる事なかつた話”を続けた。

やましい事があつた言い訳か、気を使つてくれたのかもしれない。そんな感じで、せつかく彼が色々話してくれたけど、私は全部興味なさげに、

ビードもよべ「ふーん。」と返していた。

鈍感な彼も、さすがに今日のミクは機嫌が悪いらしいと思つたのか、「ちょっとトイレ…」なんて、部屋を出て行つた。

私は一人ベットに転がつて、

ため息まじりに彼の部屋を見渡してみる。

あの頃…彼の家が新しくできたのは、確か中学一年の終わりくらいで、もちろんこの部屋に初めて入つた女の子は私だつたはず。家具の配置も、心地よい木の温もりも、暖かい日射しや香りも、何も変わらないのに、この部屋はもう全然居心地のいい部屋じやない。

窓辺をすり抜ける風邪が風鈴のいい音色を運んでいるけど、その風鈴をあげたのが私だつて事も彼は絶対覚えていないだろうな。

この部屋を埋め尽くしてゐるが、違う女の手と彼との時間なんだ。

私の居た時間は、もう昔話でしかないんだなって思つて、  
まだ会つた事もない彼女の存在に対して、

“嫉妬”や敵対心を感じずについられないの、また悲しさが増した。

彼を手放した事、いっぱい反省するから、彼を私に返してちょーだ  
い…！

そんな事口にしたら、千理にぶんなぐられるだろーなあ。なんて…。  
ぼんやり天井を見つめながらそんな事を考えていると、  
聞き慣れたメロディが耳元でまた鳴つたんだ。

確かにコレはミスチルの「抱きしめたい。」かな?  
たぶん千理が設定した、彼女専用の着信音。

今最も聞きたくない、超耳障りと言つていい音楽。

「もーー@:@¥\_!\_」私は重い体を引きずる様に、携帯に手を延  
ばして、

枕の下に投げ込んでくれるリュウタはまだ戻つて来てなかつたから、  
うるさいし、とつとと音を消そつと携帯を開いた…。

たつた数秒が待てないくらいイラつていた。（早く消えろーーー）

でも、こんな時つて悪い偶然（むしろ必然のかも。）が重なる物  
で、

適当なボタンで音は鳴りやんだけど、つかり彼女のメールを開いてしまつたんだ。  
(またやつちやつた…。)

そして、そのメールは、私を最低最悪な気分に突き落とす事になる。

それは、例えば、鈍器で殴られた様な、頭が力チ割れる様な、頭痛が走る朝の様な、

要するに、平氣じやいられない、怒り？嫉妬？何？

解んないけど、嫌な感じ。

彼女のメール。

最初はまあ、昨日はたのしかつたよーとか普通のメールで、悪かったのは最後の一文。

それさえ見なければ、私の人生は変わつてたのかもしない。大げさかもしけないけど、それくらい私には刺激の強い文だつたんだ。

【まあ、昨日はお風呂です】い気持ち良くしてもらつたし、許してあげる。またしよーね。】  
なんて感じ…。

ブチン…！…いや、カチン…！…かな…。

私の頭で、何かが確実にキレル音がした。

いいよ、別に、恋人同士何しようが関係ないよ？  
勝手にやればいいよ…。

自分に言い聞かせるけど、コントロールがスデに効かない状態だつた。

何で…

どうして…

私をコレ以上悲しませて何になるつて言つの…？

辛い、痛い、ビールショウもない。

その時すでにミクの目から、自然と涙が出て来ていた。

私は弱気な上に涙もろかったから、

今までこりえて来れた事自体すこぶるくらいだつたんだけ…。

そしてその後は次から次へと涙が出る一方だつた。

部屋に戻つたリュウタはそんな私を見てもちろん驚いた。

「何? どーしたん?」

リュウタは慌てて辺りを見渡す。

転がつてゐる自分の携帯を見つけると、

怒るのも忘れて“しまつた！”つて顔をした。

「見たの? コレ…えつとお…ごめんね。」

ワケガワカリマセンが?

必死になだめてくれる彼の事が何だかとつても滑稽に思えた。

別に悪い事もしていない癖に謝る彼に余計腹が立つた。

「何で掃除とか言つの? 本当の事言えばいいじやん! バカ! !

それから私は彼と再会してから、初めて声をあげて泣きだした。

最も昔は「うやつじバカみたいによく泣いた気がする…。

あの子と仲良くしたから、適当に返事したから、後輩にラブレター  
もらつたから…。

色々な時、色々な事でよく怒つた。

でも…

今はそんな風に泣ける立場じゃな「つて知つている。  
だから泣けなかつた…けど泣いた。

リュウタは「落ち着けつて」と困つた顔をした。

「私の事どうおもつてゐる? 何とも思つてないならつまらない嘘付  
かないでよ!」

「別に嘘じやないよ。ただ、言つのも変でしょーが。」

(確かにその通りだ…。)

「私を好きつて一体何? わけが解んないよ。」

(全くその通り。)

そして私は自分が昔彼に宛てて書いた手紙を思い出していた。

リュウタは本当に私を好きでいてくれているの? 私ばっかりがこ  
んなに好きで、一生懸命なのはどーして?

まさにその心境だった。

リュウタは元々女の子の扱いには慣れている方じゃなかつた。

あの頃も、そこそこモテていたけど、女の子に優しくする方じゃないし、気の効く方じゃなくて、こんな時どーしていいか解らないんだろう。

そーゆう不器用な彼が好きだつた。

…でも、さすがにもうしんどいなあと思つた。

リュウタはとりあえずＴＶを付けた。

私はめつたに怒らないけど、一度怒ると、何も喋れなくなる人だつたし、

リュウタも都合が悪いとだんまりで、お互い言葉が見つからないから、

この部屋にＴＶがあつて本当に良かつたと思つ。

勿論2人ともＴＶの内容なんて耳に入つていなかつた。

無意味な雑音でしかなかつたけど、とりあえず重い沈黙をＴＶが埋めてくれて、安心した。

ひとしきり泣くと、私は少し落ち着きを取り戻してはいたけど、やつぱり空しさは消えなかつた。

「大丈夫？落ち着いた？」

リュウタがきますように顔色を伺つて来る。

「うん、ごめん。」

「いいよ。」

それから私はまた聞いた。

何かどーでもいい気分だつた…。

「ねえ、私を好きって言ったのはなんだつたの？友達としてって意味？浮気相手としても見てくれないの？」

リュウタは予想どおり困った顔をして、

「解らない…」

と言葉を濁らせた。

でも彼はとても不器用だった。

別に本当にだまそつとかそんなつもりじゃないんだろう。ただ、本当に言葉が見つからないといった感じだった。

それから再びリュウタがTVに手をやわらぐとする。

（何で私を見てくれないの？）

リモコンを取り上げてTVを切つてやつた。

だけどまた、恐ろしい程の沈黙に包まれて、私まで途方にくれてしまう。

でも何か喋らないとと必死だった。

それからリュウタは、ゆっくりと自分の話をし始めた。

「あのね…。」

「うん。」

「私、まだ処女なんだよね。」

「はあ？ マジで…？」

リュウタはビックリして手を見開いている。

「嘘…とにかく…」と言つてまた黙り込む。

確かに嘘じやない。  
ミクは処女だった。

中学生の時点では、リュウタとも途中までしていたし、  
高校に入つてからだつて何人か彼と呼べる人はいた。

だけど皆“途中止まり”なぜかつてやつぱり痛そうで怖かったのと、  
そこまでその行為に興味が湧かなかつたのが原因。

もつと人として深く繋がつていられる様な彼が欲しかつたし、  
ソレをしてしまつと、先にももつ心のつながりはなくなつてしまつ  
氣がして魅力を感じなかつた。

で、気付いたらもつ18にもなつてしまつたのだ。

要するに、すゞしく幼い女の子だつた…。

「引く?」一ゆう子は好きになれない?」

私が悲しそうな目を向けると、リュウタは慌てて、

「なんでそんな事言うの?別にそんなのいいじゃん。」

そう言つたけど、

何だか私はリュウタの彼女よりもずっと自分が子供で、  
女として劣つていると感じてしまったんだ。

そーなるともう自分がみじめで価値さえない氣がしてしまつ。

悪い癖。

それから、

「浅田くんとかとして来たらびーする?」

「冗談ぽく聞くと、リュウタは少し怒った様に、  
「やだよー」と言った。

一瞬嬉しかった。

けど、

それはお気に入りのおもちゃを他の子供に貸したくないとか、  
欲しかった服を友達に先に買われた…みたいなそーゆつ「嫌」って  
いう程度しかないんじゃないかつて私は思った…。

好きと言う一つの言葉の中で並んでいても、私達は対象じゃない。  
ふ揃いでガタガタ…左右対称。

だからこそ、こんなに好きになれて、美しいと思ひすがりだらう  
か？

私の気持ちだけがどんどんはみ出して形を崩してしまつのが解る。

リュウタはきっとこんな私を好きになってくれない。

あ～自信持てるわけない。

「あの頃まずはやつてれば良かった。」

「何言ってんのー！」

リュウタの表情は、ますます氣まずそつに困った笑顔で強張つてい  
つた。

あの頃も、

そして今も変わらず、

キスも、

もちろんエッチもなしに、

ただ隣に並んでいた私達。

キレイだつたよね。

汚い物は見なくて良かつたし、やーゅうの純粋っぽくて…。  
でも女と男だから、やつぱりそれじゃ 一つになれない。  
こんな私を彼女より好きになつてくれるわけないじゃん。

「今日はもう帰るね。 そんで浅田くんとか誰かに処女でもさわがれて  
くるか~。」

「何言つてんの、お前アホだなあ。」

「アホだよ。アホだしバカだよ。別にあんたの彼女でも何でもない  
もん、関係ないじゃん!!」

リュウタはまたおじだまつてしまつた。

「じゃーね。」

軽く肩を叩いて部屋を出る。

自分でも飽きれるくらい嫌な奴になつてゐる、

でも他にどんな態度をしたらいいか思い付かないし…。

「バイバイ。」

「…うん。」

私はその時

この恋はもう絶対に動かせない。  
もう駄目だつて思ったよ。

もう彼に期待する事も、自信を持つ事も、

我慢も限界だつたんだもん。

もつ終わつたつてその時は本氣で思つたんだ。

## 最後の奇跡

リュウタの家を出て、  
熱くなつたハンドルを握る。

どこへ行こう…。って考える。

この恋は終わったの?  
終わったよね?

リュウタの困った顔、

彼女の気配が残る居心地の悪い部屋で泣いていた自分。  
今日は本当に最低な日だった。

最近どんどん冷静さを失っている。

だからもう会わない方がいい。

それに…。

どんな顔して次会えつて言うの??解かない…。

ミクはとりあえず、休みがちだったバイト先に顔を出して、夏休みのシフトを入れた。

夏休みはきっと一人で過ごすから…。

それから、大樹と多香子に今日の出来事を電話で報告する。  
慰められて少しホッとした。

最後にあの桜の公園で、もう花の付いていない、葉っぱだけの木々を眺めたりして帰った…。

リュウタが居なくてもやる事は沢山あるんだから…。

机に目をやると、

山積みの課題が散乱していた。

課題の提出は明日、終業式の後。

コレを出さないと追試が受けられない、  
自動的に留年決定と言つわけだ…。

ミクは重い体を机に向かわせる。

（何だつてこんな気分の時に限つてこんな物やらなきやいけないん  
だろ？？？）

課題は教科書を丸写しするだけの簡単な物だつた。

頭を働かさなくてもできるからちょっとありがたく感じた。  
だけど、それは本当に莫大な量で…。

今までどれだけ自分が彼に振り回されていたか思い知る。  
チクタク時計の音が耳に響いては消えて行つた。

どうして、終わらないの？

甘く見てた…。

何もかも…。

恋も…。

ミクの頭の中を色々な気持ちが交差して、ますます気持ちは落ちて  
行つた。

別れたつてまた運命が重なれば巡り会えるつて思つてたし、

彼女がいたって本気になれば想いが伝わるなんて…甘い気持ちでまた彼を好きになつた。

甘かつた。

私が悪かつた。

もう…

彼とは…

終わつたんだ…。

ミクの手は止まつていた。

やつぱり課題ぢりぢりじゃない。

バイトとかも、何か違う。

やる事は沢山あるはず…。  
でも、違うんだ全部。

知つてゐ、解つてゐ。

彼がいないとこの世界中も、  
これから来る夏さえも、

無意味。

駄目なんだ。

私の心中に悲しい気持ちがどんどん広がって行った。  
もう彼と顔を合わせたくない。  
だけど…

悲しいよ…。

課題はちつとも進まないまま時計の針だけが進んで行った。  
もう夜中の1時を回りうとしている。

もしも…今彼が私に会いに来てくれたら…。

ミクの頭はやつぱりリコウタの事でいっぱいになっていた。

神様がいるならもう一度彼と…。

…そしてその時、奇跡は起きた。

机の上、散乱する課題の山の中からオルゴールの音楽が流れたんだ。

リコウタの着信音。

もう鳴らないと思ったし、鳴らすのもやめようと思った彼の音。

出る?出ない?

(そんなの決まってる…。)

ミクは深呼吸をして携帯を手に取った。

「はい、もしもし？」

精一杯普通の声のトーンを装つて、何でもないフリをする。だけど、彼が逆に普通じゃなかつた。

かすれた様な弱々しい声でいつもの明るくて威勢のいい彼の声とは明らかに違つていたんだ。

「どうしたの？ 何かあつたの？」

私はすぐに彼の異変に気がついた。

リュウタのかすれた声が小さくつばを飲みこんだ後こうひつ語つた。

「俺、彼女と別れたから…。」

…え？？

「さつき彼女と別れたんだ、もうお前とは無理だからつていつたんだ。…今すぐ会いたい。」

リュウタの細い声は、まるで泣いているみたいで、小さい動物の様にとてもか弱く今にも消えてしまいそうな程震えていた。

「どうして？ 昼間私が変な事言つたせい？」

「違うよ、ちゃんと考えて…。でも…」

彼の声がかされて濁る。

「でも…何？ 本当にそれでいいの？ 大丈夫なの？」

リュウタの震える声が、ミクにも同じ様に不安を感じさせた。

びひょひ…びひょいたらいいんだひへ…?  
解らなかつた。

リュウタが小さな声でつぶやいた。

「寂しい。…お願い側に来て。」

いつも強気な彼の態度はどこにもない。

ただ、ちっぽけで消えてしまいそうな光の様に、彼の存在を尊く想つた。

リュウタがどんな気持ちで電話をかけて来たのか、  
そして、私はこの先どうなるんだろう?

頭を過る色んな気持ち。

言葉ではうまく言えない感覚。

私は初めて感じたんだ。

(ヒーーのを愛しingで言つただうつな。)

リュウタの辛さなんて解らない。

私、今最悪な人間になつてる。

だつて、彼がまた電話をくれて、彼女と別れたつて言つて、  
私を頼つて、弱くて、小さくて、そんな彼にこんなにも…。

ドキドキしている…。

こんな時人間つて本当にざるい生き物だよね。

こんな気持ちになるなんて、  
自分って嫌な奴だよなって本当思つよ。

「私、前言つてた課題明日までだから、終わつてからしか行けないよ？」

（本当はいますぐ行つて触れたいけど……。）

ミクの返事を聞いて、リュウタは催促する様に念を押した。

「いいよ、待つてるから、早く来て。」

私はそんな彼をとても愛しく想つていた。

「解つた。待つて。」

私は山積みの課題を猛スピードで片付けた。

それから、2人でやつてもばれなそうな課題をカバンにほうりこんだ……。

この貴重な夜が終わつてしまつ前に彼の家へ行くために。  
それから、部屋にあつた制服を適当に着て、  
原付きのエンジンをかけた。

親に見つかつて止められたけど、そんなの知らんフリだつた。

AM 12:30。

ミクは通い慣れた道をいつもよりスピードを上げて走つて行つた。

リュウタの消えてしまいそうな光で、  
私は自分の未来を必死で照らしていたんだ。

通り慣れた道は驚く程遠く感じたけど、  
誰も居ない真夜中の道も、  
その時のミクには全然怖くなかったよ。

AM12:30

彼の家がもうすぐ見える。

## 真夜中のときめき

真夜中は…

不安を感じさせる重たい闇に包まれて…

だけどその先に…

明るい朝を予感させる不思議な時間でもあった。

(彼が心配だよ。)

だけど、それとまつりまじり、

ドキドキしてた。…期待してる自分。

(「めんね、辛いよね。でも許して…。」)

だつて本当はずつと待っていたんだもん。

彼の口からその一言を聞く日を…。

「彼女と別れたよ…。」

改めてリュウタは私に言った。

「うん。」小さく返事を返す。

私はどんな顔をすればいいか迷った。

悲しげな彼の表情とはほんはらに私は喜びを感じず、困られなかつたから…。

とつあえず彼の隣に座る。

昼間と何も変わらないリュウタの部屋。

だけどさつきまでなかつたはずのお酒の缶が転がっている。  
あんまりお酒は飲まないって言つてたくせに…。

そんな彼がいじらしくて、私まで切なくなつた。

「飲んでたの？お酒駄目でしちゃう？」

リュウタは瞳を潤ませながら、堅い笑顔を作つて言つた。

「何かね。いいじゃんこんな気分の時もあるよ。」

そう言つてうつむく瞳はとても悲しく見えた。

「そうだね。わかるよ。」

ミクも笑顔を浮かべた…。

それから、どうしたら彼が彼女を忘れてくれるのか、  
頭の中はその事でいっぱいになつた。

（彼は今、何を想つの…？？早く彼女を忘れて…。泣かないでよ。）

ミクはリュウタの髪をなでた。

リュウタは何も言わないのでうつむいている。

「辛いよね…。一年もつき合つて来た彼女だもんね…。」

「そりゃ…やっぱ、少しほ…。」

リュウタは必死で何かに耐えていたみたいに遠くを見ていた。

ミクの中にも、期待と不安、それから罪悪感ももぢりん、  
彼と同じ様に複雑な気持ちが広がつていぐ。

二人の間に割り込んでしまつた事。

それから彼に悲しい想いをさせてしまつた事。

本当に「ノレ」で良かつたかなんてやつぱり解らない。

だけど、もし、彼が今私を選んでくれるなら、  
その罪悪感も、不安も、一緒に背負つてあげたい。  
私はそう強く心に想つたんだ。

（だからお願ひ…。もう迷わないで。）

私を好きになつて…。

喉越し今まで出かかつていたその言葉を飲み込んで、  
ミクは黙つて彼に寄り添つた。

それからしばらぐ一人で並んでTVを見たり、課題をかたづけたり、  
いつもの様に、何でもない時間を過ごした。

彼は努めて平然を装つていたのかもしれない。

それでも私には、とても尊く、幸せな時間だったんだ。

こんな時間がこれから先ずっと続いてくれたらいいのについて、

強く強く想つたよ。

今ここにある幸せな時間だけが明日に続いたらどんなにいいだろう  
…。

早くリュウタが彼女を忘れてくれて、  
自分も幸せになれたら…。

ミクはそつと彼に近付いて、一人の距離はとても近くまで來ていた。  
リュウタももう、それを拒む事はなく、私も彼を怖いと思わなくな  
つていた。

「ねえ…」

リュウタが小さな声でささやいた。

「何?」

顔をあげると、すぐ側まで彼の顔が近付いていた。

ミクは自分の鼓動が早くなるのを感じていた。

そして、リュウタの細い髪が、かすかにあでこに触れた時、彼の口からついにその言葉を聞く。

「キス…してもいい…?」

まるで、初めての感触。

ミクの体中に、熱くて激しい気持ちが走った。

ミクも彼の頬に触れて答える。

「駄目なわけないじゃん?」

潤んだ彼の瞳と田を合わせると、  
彼に力強く引き寄せられて、

…そして、ゆっくりと、お互の唇が重なった。

煙草の苦い香りが広がり、

舌を絡ませる度、その香りでミクは酔いそうになる。

頭の中では、過去の記憶が広がった。

それは、もう忘れてしまった。いつもの彼とのキスの記憶。

13歳で、初めてキスをしたあの日、それから、観覧車のキス、花火の時も…。

どれも素敵な出来事なのに、幼く、子供じみていて、だけど、どれもキレイな思い出で…。

それから、いつしかそんな事にも慣れて行き、彼を手放した日の事も…。

全部思い出した…。

沢山の記憶が蘇る。

私の心を、体中を満たして行くこの気持ち…。

沢山の後悔や罪悪感と一緒に、止まっていた時が再び動き出そうとしている…。

もう迷う事はない。

ミクにはリュウタ、そう、ただ一人だよ。

まるで初めてキスをした時の様に、ミクの心は高鳴っている。何人もとかわしたどのキスよりも、今、彼の唇は私を惑わせて、搖さぶっている。

それは幸福を案じさせる、小さな奇跡にも思えた。

明日も明後日も、その先も…。  
ずっとずっと感じていきたい。

なんとも言えない気持ちだった…。

そして彼の手が頬を離れ、じすかにミクの服に滑り込む。

「いい?」

「うん。大丈夫。」

ミクはむづびうつてもいいと思つた。

「だけど…。」

「ん?」

リュウタが不思議そうな顔でこっちを見ている。

ミクの心はもう彼の物、でも彼の心はどうにあるんだ…。  
それだけが心配…。そう、あとはそれだけ…。

「ねえ、本当に彼女の事はもう…もう他の子と一緒に…やつてしまいの?」

リュウタはあいまいな笑を浮かべる。

(お願い、もう私だけだって言つて…。そしたら安心して、リュウタの物になるから…。)

でも彼は、やつぱり答えなかつた。

その時彼の中にはまだ、迷いがあつたのかもしれない。

仕方…ないか。

それ以上はもう考へない事にした。

「やつぱ…やめようか?」

リュウタは静かに手を離そうとした。

「…めん、違うの。何でもないから…。」

「 セ、？」

「 う、」

「 やめなで……。」

「 解つたよ。」

リュウタの力にまた引き寄せられる。  
安心する……。

今度はミクから彼の首に手を回して、  
リュウタの細い髪、  
色白な作り物みたいにキレイな体をゆっくり確かめる。

声も、指も、全部が全部。

触れる度に心地よくて、懐かしくて、でも初めての感触。

今だけは、嫌な事も全部忘れられる気がした。

今はこれでいいんだ。

きっと大丈夫。

ミクは自分に言い聞かせていた。

「 リュウタが好きだよ。」

そしてその夜、リュウタの体の重みと、  
その手や、唇の感覚は、ミクの理性やプライドまでもジーでもいい  
と思わせた。

時々耳元で彼の息がもれる度、ミクは頭がおかしくなるくらい興奮  
をせりふたんだ。

時々見た事もない彼女の顔が私の脳裏を過つたけど、  
彼も同じ様に彼女を思い出しているんだろうか…。

ここは天国なの?  
それとも地獄なの?

もうビードモいい。

長い空白を埋める彼、唇、声、その全部で、  
ミクの頭は空っぽになる。  
彼以外の世界はもうぼやけて見えなくなつてゐる…。

長い夜…。

ミクの心はもう完全に彼1人の物。

きっとこの先もずっと…。永遠に…。

長い夜の暗闇に浮かぶ、曖昧な光。  
そのかすかな光に導かれて、

新しい朝を探すんだ。

その夜、ミクの心の中は、

幸せな彼との未来でいっぱいに埋め尽くされた。

明日はどんな日が待つてゐるのかな?

明日が来る事があんなに待ち遠しこと想つたのはきっと初めてだつた。

寝不足の日にしみる朝の太陽。  
どうでもいいけど、どうして朝はこんなにだるいのか…。

ミクは考える。

真夜中は本当に不思議。  
まるで魔物でもいるんじゃないかなって、あまつこいもアリアマティックな感覚。

それなのに、太陽が顔を出したとたん、夢は終わって現実に戻されると、  
髪もボサボサだし、何だか間抜けな顔の一人…（現実なんてこんな物か…。）

「眠い…。」

「俺も…。」

二人は重い体を起こして、乱れた髪を直す。

「そんで、今田学校行くの？」

リュウタが聞いた。

「まあ、今日行かないとヤバいから。終業式だし。」

そうは言つたけど、課題さえなければ絶対さぼりたい…。

時計を見ると、もう朝の六時近くだった。

「そろそろ母さん起きるかも…。」

「マジで？」

「うん、そろそろね~。」

リュウタは布団を頭までかぶつてもう一寝入りしようとしている。

一足はやく夏休みに入っていたリュウタの学校が疎ましい。

(本当はもつと一緒に居たいのにな)

でもやつぱり、現実には恋だけじゃなくてやうなきやいけない事が沢山用意されている。

それに、彼はもう彼女と別れたんだもん、焦る心配はないか…。

自分にそう言い聞かせると、

制服を着て化粧を直し、散らかっている課題を乱雑にカバンに詰め込んだ。

彼は布団の中からその様子を見ている。

ちょっと腹立たしい。…でも、こんな時間が何だか愛しいと思つた。

「ねえ、本当に行くの？」

リュウタが甘えた声で聞いてくる。

「行くよ。これで学校休んでたら今度こそ親に殺されるつて。それに、リュウタのお母さんにはち合わせるのもさすがに嫌だしね。」「そりやうつだ。」

リュウタはいたずらな子供の様に皿を締めて笑つた。

あーなんて幸せな朝の光景だらう…。

私は何だかうれしくて仕方なかつた。

彼は、余韻に浸つているミクの腕を、ベットの中から掴んだ。

「ねえ、今夜また会える？」

無邪気な彼の笑顔に、自然と笑がこぼれる。

「じゃあ、学校終わつたらまた来るから、ちやんとそれまでに起きててよ。」

思わず口元が緩む。

「はいはい。」

リュウタも笑顔を返してくれた。

「あー、あと昨日やつてたゲーム私が来るまで進めないでねーーー！」

「解ったよ。」

ミクは急いで彼の家を出た。

何でもない普通の会話を交わす。  
当たり前の幸せ。

私はこの時何も疑わなかつた。

彼から次の約束をしてくれたし、こんな口がこれから続くんだなつて素直に信じた。

安心してしまつた…。

でも…実は、この夜には一つだけ問題があつた。  
だけど、明日もリュウタとの関係が続くと信じているミクにとって、  
それは焦る必要もない事だつたんだ。

（今日が駄目でもこれから毎日会えるもんね。大丈夫…。）  
そう思つたんだ。

「で、その問題とは何！？」

学校へ着くなり、さつそく菜穂達と机を取り囲んで会議が始まる。

「えーと、まずコレはどう事ですか？ミクさん？」

未織がミクの首元を指差した。

首元にはくつきり赤いあざができている。

「うわっ！…いつの間にそーゆう事になつちやうわけえ！…キス

マーク付けるなんてやらしい！」

菜穂が頭を抱える。

「 本當だ。」（自分でも気付かなかつた…）

「一人だけずるいよ！！」

「で、彼と最後までしたんでしょう？？どーだつた？」

私がそこへ答えると

「あんたのことはすでしょーかー！どうして事  
ないわけないでしょー！」

菜穂が何だか興奮気味になってしまふ

でも実は……。

「え？！」

黙つて聞いていた亜子も、何だかフに落ちないと感づた感じでこつちを見た。

そう、最後までしない。

要するに、  
処女だし痛いし、  
朝来ねやつし、

中途半端な状況で……。

ミクとリュウタはまだ一線を超えていなかつた……。

あんのじょうそんな反応…。

「そんな驚く事？」

「そりや驚くでしょ！…あんたバカ？」

「菜穂が切れている。

「なんで今更拒むのよ～。」

「違うよ本当に！あたしだつてしたかったよ…でも、何か朝になつてたし、痛いし。」

不機嫌そうな菜穂に今度は亜子が口を挟む。

「ミクは菜穂と違つて純粋なのよ いいじゃない、今日じゃなくたつてコレから時間はあるんだから。」

私もそう思う。

だけど菜穂は納得いかない顔でこちらをにらむ。

「やつてない上、つき合つて約束したわけでもないんでしょう？ それって大丈夫？」

「大丈夫、だつて別れてくれたつて事は私とつき合つてくれるつて事でしょ？？」

「まあ、そうだけど、そんな簡単にあの女と切れるかな？」

「そ…それは…。」

「男はやっぱり気持ちだけじゃ繋がつていられない生き物だと思うよー、ちゃんととした事実を作らなきや、いつでも前の女のとこ行つちゃえるんだから、次はちゃんと最後までした方がいいよー。」

「そつかあ」（確かに思つた…。）

ミクは決心した。

今夜リュウタと昨日の続きをして、

ちゃんとこの先の答えを聞こひつて…。

大丈夫、彼を信じてる。

もう少しで、私達、恋人同士に戻れるよね。

ミクはこの時まだ気づいていなかつた。  
彼の心が今、どこにあるのかを…。



灰色の景色、歪んだ気持ち。

明日、希望、永遠や約束。

あいまいな物なんて大嫌いだった。

だって信じて裏切られるのって怖いでしょう？  
だけどミクは解ったんだ。

信じられないからこそ信じたい事もある。

例えば彼との事、永遠とかつて言葉も…。

今日は結局終業式とHRだけだから学校が終わったのはまだ午前だ  
った。

退屈な担任の話が耳を素通りしていく。  
窓の外はもう夏の熱気に包まれていた。

誰もが明日からの夏の予定を思い描いてる。  
ミクも例外じゃない。

はつきり言つて浮ついていた。

今夜の彼との会話、それからまた花火が一緒に見れて、  
彼のバイクが来たら一番に見せてもらひつ事。

他にも沢山！

想像は尽きない。

彼の隣で手をつないで歩きたいな…とか。

（千理は今頃どうしてゐるのかな？夏休み初日から可愛そ‘う。）

勝手な妄想で胸がいっぱいになる。

（千理は今頃どうしてゐるのかな？夏休み初日から可愛そ‘う。）

「なんて

ライバルの心配までしてみる自分。

本当にのんき。

「でもうれしいな。

今日ばかりは皆ホームで溜まつて喋る事もない。

菜穂達も大人しく反対方面の電車に乗つて帰つて行った。  
ミクと亜子も寄り道せずに電車に乗つて、

それぞれに思い思いの夏休みが待つてゐるんだろうな。って考える。

今しかできない、若くて、幼くて、きっと人生で一番の夏の始まり。  
18の夏、もう2度と来ない最高の季節になるかもしない。

大好きな彼と再び巡り会えた事で、

ミクの胸もいつそう期待で膨らんだ。

「今日は何だかいい顔してゐる。本当うつとうしーよアンタ。」

亜子にほっぺたをつねられて、ミクも亜子のほっぺをつまみ返す。  
一人で変な顔をしながらクスクス笑つてはしゃいだ。  
流れる景色や町の風景もギラギラ輝いている。

電車の中は楽しそうな学生でにぎわっていた。

「リュウタくんとは何時に会うの？」

「うーん、解らない。でも夕方かな？」

「去年行つたかき氷のお店がまた始まつたらしくよ、時間あるなら  
寄らうよ。」

「いいねー 化粧直してから帰りたいし。あそこならすぐ帰れるしね。いいよ。」

ミクは機嫌良く誘いに乗った。

「やつたー、決まりー

（楽しいな。）

ミクは友達が大好きだった。

この季節も、おいしいお店に寄り道する事も、バイトも、恋も。何もかもが揃つた気がして、心満たされた日だった。

（こんな日が明日から続いたらどんなに楽しいだろ？な。）

幸せと詠つ、形のない物をミクは信じてもいいかなって思い始めていた。

あんなに期待しないって決めてたのが嘘みたいだ。

でも、そんなミクの心のどこかにはやっぱり不安が残っていたのかもしれない。

そして、それはもう、すぐ近くまで近付いていた。

私の知らない所で、黒い影は確かに広がっていたんだ…。

流れる景色、にぎわう車内、ミクと亜子を包んでいた楽しい気持ち、一通のメールから全て崩れて行く。

それは彼からの一通のメール…。

電車は長いトンネルを抜け、圈外だった携帯の電波が一本になる頃だった。

ミクの携帯がいつもの着信音を鳴らす。

「噂をすればリュウタくんじゃない?」

里子が一矢一矢携帯を除いた。

「うわ、西日本に

「お、亞士が語りてあるよ」

「オルダを開いた」と

彼女の顔は、まるで自分が告白でもされたみたいに赤くなる。

九月一  
九

「え！？」

予想外な内容に私も思わず赤くなる

「やだ、」んなの冗談だよ、そんなキャラ

やハ、御、二、三、日、一、二、三、日、五、六、日、あ、た

まさか彼がこんなの送つてくるなんてまったく予想外な出来事だつ

でも浮かれていた私達はそんな事深く考えなかつた。  
彼も浮かれてる。

勝手にそう思つただけ。

私は亜子にせかされるままリュウタに電話をかけた。  
すぐさま彼に繋がった。

私達は何となく嬉しくて顔を見合わせた。  
受話器の向こうから声が聞こえる。

「もしもし…。」

その瞬間だった。

黒い影が私を包み込んだ瞬間。

ミクは携帯を握りしめたまま言葉を失っていた。

「ミク…どうしたの？」

亜子の不思議そうな顔を今でも忘れない。

さっきまでの穏やかさはどうに行っちゃったのか？

私は黙つて亜子に携帯を渡した。

数秒後、亜子も同じ様に青ざめる。

電話の持ち主はリュウタじやなかつたんだ。

確かに番号は彼の物で、彼の携帯に間違いないんだけど…。

聞き慣れない高く細い声、

その声の持ち主は、今までに一度も聞いた事のない声で、  
だけど確かに私は知っている。

甘えた様なかつたるい口調。

かわいらしく振舞えそうな器用そうな女の声。  
耳障りで、大嫌いな声。

初めて聞いた…でも解る。

私と同じ様に彼女も何となく正気じゃない。

その声は千理…リュウタの彼女、  
それ以外の誰でもなかつた。

「パンダちゃんね、引っかかると思った。私、誰だか解るよね?リ  
ュウタくんの彼女です。」

甘つたるくて耳障りな細い声、  
どうして彼女が電話に出たの?

頭が混乱して、思わず電話を切つた。

その後すぐに彼からメールが入る。

【彼女が勝手にメールして、電話した。本当にごめん。】

ミクと亜子は顔を見合せた。

二人は同じ事を考えていたと思う。

今度は誰が打つてんだ??????

リュウタの事が信じてあげられなかつた。

どうして彼は今彼女といの?

どうして別れたのに“彼女”って呼ぶの?

今電話に出たら私はどうなつちやうの?

一人は何をしているの？

【本当にリュウタなの？誰がメール打つてるの。不安だよ。夜家電  
から電話ちょーだい。今は電話出れないよ。】

せいいいippaiの言葉だった…。

冷静で居られなかつた。

楽しそうににぎわう学生達の声が、  
もつもつと遠くで響いてる気がした。

言葉にならない。

ミクは考えていた。

あの細くて甲高い、でも強く震えるあの声。  
考えはまとまらない。

いくつも数える彼との記憶。

出会いで、恋をした。  
好きになつてつき合つた。  
キスをした。  
別れを告げた……。

でも、彼を忘れる事はなかつた。

自分勝手にまた巡り会つた。  
数少ないメールと、何でもない会話。  
一晩だけのキス。

でも、彼の心は、

最初から最後まで解らなかつた。

彼女からの電話。

手が震えて、言葉が見つからないのは、  
彼女の怒りが、自分のする事が、彼の気持ちが……。  
とにかく、一人をめちゃくちゃにしようとした自分が……。

間違っている……と、  
知っている…から?

本当はね、始めから解っていたんだよ。  
コレはいけない事だつてね。  
自分でも苦しかつたんだよ。

もしも彼女が自分だつたら、彼を許せないし、  
彼ともう一度つき合つたつて、

彼女と同じ様に、彼の心の中に誰がいるのか心配になるだけ。

彼はそういう男。

でも、ソレがたまらなく魅力的で、  
たまらなく好きだつた。

彼の言う彼女の行動はどれも理解できなかつた。  
彼を束縛して、自分の側にずっと置いていたくて、  
彼のプライベートを探つて……ただ、自分の物にするために……。

いつも反発した。

あんな女と一緒にしないで。  
あんな女には絶対ならないから。  
あなたをもつと自由にしてあげる、  
だから…

私は何をしようとしていたの??

だから、私の側にいて。

私から離れず、ただそこにいて。

私を置いて行かないで…。

本当は気付いているの。

私はあの子と同じ。

自分勝手にただ、わがままに、  
あなたを離したくなくて、

ただ、それだけの為に、

彼女を無視して近付いたし、

あなたにいくつもの嘘をきつとつかせた。

あの子と同じ。

あなたをとても深く愛していく、

そしてあなたをとても苦しめてしまう存在だったに違いない…。

ぶつきりぱつで、適当で曖昧なあなただけど、

本当は不器用で優しい男の子だった…と思つ。

優柔不断だし、バカばかりして、

だけど、私達を決して傷つけなかつた彼。

嘘も、いいかげんな約束も、

どれもうれしかつたし、

つなわたりみたいな関係に、

勝手に夢中になつたのはこつち…。

私達はあなたをとても愛してしまつた。

あなたのいいかげんな言葉は、

未来を信じる気持ちに拍車をかけて、

側にいる時も居ない時も、  
そのキスは、その先の出来事を想像させた。

いつも会いたくてたまらなかつた。

私は彼女にきっと見透かされているんだ。  
私が一人にしている事は、  
どんなにずるい事だつたのか、  
私も彼女も知つてゐる。

怖い……。

逃げていた。

彼女から……。

彼に突き放されるのも……。

だから、理解があるフリをして、  
あの子とは違うって言つて、彼に近付いて、  
でも本当は同じ事だつたんだ。

きっと彼だつて解つてた……。

怖いよ。

本当は彼を好きになる資格なんて私は持つていなかつた。

あの、灰色の空気がまた肺を埋め尽くして、  
海底にいる魚みたいに、

あなたとはもう一度と会えない所に行かなきゃいけないのは……。

本当にたまらなく悲しこよ。  
怖いんだ…。

あの大好きな沢山の思い出達は、  
私の中ではきっと、もう一度手に入らない宝石の様な記憶なのに、  
残らず捨ててしまうのも、  
あの子にあげてしまつのも嫌だよ…。

言わないで…。

解っているの。

ずるくて、幼くて、いいかげんで、  
無理もない。

こんな私が彼を彼女から取る事なんてできない。

最初から知っていた。

なのに何で？

いつの間にこんなに彼に依存してしまったの？

どうして見返りのないこの恋にこんなに夢中になつたの？

優しい彼のあいまいな言葉達。

私達二人を好きだとつて夢中にさせた。

とても罪深い彼。

だけど嫌いになれないの。

なんで？？

なんで？

…なんで？

やりたいの？

## 邪魔者は誰だ。

里子のスプーンがすくすく、  
キレイな緑色、

それからミクの前には鮮やかすぎる程のピンク。

「里子って何か泣いよね…。」

私の言葉に里子はすかさず反論する。

「何言つてんの…！…あんたこそ何そのド派手なかき氷。意味解らん。」

「

里子のスプーンがミクの氷をすつた。

「ハイビスカスだよ。かわいいじゃん。うまいでしょ？」

「うーん、まあまあ。でもおいしそうに言つて瓶に全然食べてない。」

そう言つてまた宇治金時を食べ始める彼女。

それを見ている私。

何かとても蒸し暑くて頭が回らない午後だ…。  
でも、どこかで変な汗がずっと出てる僕もして…。

あー尋常じゃないってこと…？？？

机にはピンクの染みが広がつて行く。

「食べないの？溶けてんだけど…。」

「あー、うん。」

さつもつと上の空だった。

亜子がひじをついてため息をつく。

「やつぱつもつぱつが。こんな事しつけの場合がなつしぬ。」  
「えーーー！」

亜子は私の事を呆れた顔で見ていた。

「 もう少しだけ… お願い… ! !

彼女は首を横に振る。

「だつて、リュウタくんに家電かけてつて言つたし、いつまでも携帯○フフはまづいよ。

卷之三

一人は電源の切れたままの携帯を見つめていた。

「やつぱ…電話出るしかないですかねえ…。」  
「まあ、そんなんじゃない?」

亞子のあきれ顔は私を不安にさせた。

解つてるんだ。

するいのは私だつて。  
だけどなんか。

さつそうと帰り支度をする彼女を横目に、私もしぶしぶ席を立つた。

(彼女が怖い。自分のして来た事、それを認めるのが、怖い……。)

「避けては通れないんだよ。覚悟してたんでしょ？」

「そう…（なんんだろうか？）」

「大丈夫、リュウタくん彼女と別れたって言ったんだもん。あんたを選んだんだよ。」

亜子の弱い口調は頼りなく聞こえた。

お互いそれ以上言葉もなく私達は店を出た。

外はやつぱり蒸し暑くて、

町は夏の始まりにざわめいている。

だけど、私の体は冷たく冷や汗は止まらなかつた。

リュウタは確かに彼女と別れたって言つた。  
けど…。

でも、私とつき合つなんて一言も言つてないんだもん。

よく考えたら、信じる信じない以前に、

カンジンな彼の気持ち…はつきり解かないままだつたんだ。

彼を信じられるわけない。

でも私達は口に出せなかつた。

駅へ向かう足取りは一人共無い。

「大丈夫だから、ビー考えたつてあんな女誰も選びませんから…！…  
背中を押されて電車に乗つて、  
手を振る彼女が小さく消えた…。」

それから私は電車に乗って、  
流れる景色をいつもより早く感じながら、考えていた。

（田子は“あんな女”って言つてくれたけど、  
本当は彼女はやっぱただの被害者なんだよね…。  
リコウタも中々ズルいけど、  
でもやっぱ私が一番最悪かな…。  
もつひとつか遠くの町に逃げてしまいたいよ…）  
なんて。

電車の壁にもたれかかって、静かにその場にうずくまる。  
良くない考えばかりが頭をかすめて胸がいっぱいになる。  
本当の“邪魔者”が誰なのか…。

たぶんもつ全員が解つてる…。

リコウタにも…もつ…  
思われる…？？

辛い事だ…。

（それでも私を選んでくれたらいいのに…。  
頭の中はそれだけだった。

家に電話を入れると、

7時近いのにやつぱり彼からのやつぱり電話はないと言われた。  
でも手に汗がにじんで、やつぱり携帯をひこひこできない。

「レジや駄目…もつ逃げられないのに…!!

とうあえず私は、重い体を引きずる様に、多香子の家に駆け込む事にした。

一連の事情を多香子に話して、  
携帯の電源を入れなくちゃ。

ミクは駅に着くと、  
すぐさま原付きにまたがつた。

「もしもしし？多香子？今から行つていい？」

「どうしたの？何かあつた？」

「うん…リコウタの事で話があるから、すぐ行く。」  
多香子はだいたい察していたんだろう。

返事はイエスだった。

それからすぐ彼女の家へと急ぐ。

リュウタの家から近いその道のりは、  
いつもと違つてとても暗く感じた。

部屋に入ると、多香子は心配そうに私を見た。

「で、何があつた？」

私はまるでダムが決壊したみたいに多香子に全部話した。

不安に思つて来た事、昨日の夜の彼の態度、  
彼女からの着信や、彼になりました彼女からのメール。  
怖い気持ち…

きっと多香子もどおしていいかなんて解んなかつたと思つ…。  
迷惑かけてごめん。

心の中でそう思いながらも止められなかつたんだ…。  
多香子はうんうんと静かに話を聞いてくれた。

不思議な物で、心が落ち着いて行くのが解る。  
(あー私つて駄目だなあ‥。)

多香子が静かに口を開く。

「そうか、それは辛いね。彼女マジでいいね。」

「ね。」

本当はそんな事言えた立場じゃないんだけどね。

それからやつと携帯の電源を入れる事にした。

「いつから切つてんの？携帯。」

「昼からずっと。何回か女から電話あつたから。」

「つて、事は… またくるよ？あんた大丈夫？」

「うん…（うん…）」

もう後戻りはできない。

「行くしかないでしょ。」

「うん、他に道はない！」

電源を入れる。

予想通りすぐに着信がなった。

“リュウタの携帯”

もちろんその相手が彼じゃない事はすぐに予想がつく。  
でも‥

「出るしかない…よね。」

「うん、頑張れ。」

体中から冷や汗がまたあふれだし、手が震える。  
電話を取つて、静かに耳に当てる、

…聞こえてくる。

わしきと同じあの声だ。

私の知らないリュウタを独占してゐる女の…

甲高くて、耳障りで、  
一生きつと忘れない。

その声の持ち主は、  
やつぱり…

千理、リュウタの彼女。

「もしもし、パンダちゃんかな？」

むかつく。

たぶんそれはあたしのアドレスの中にはまだ書いて文字があるから。

見透かされるとこ、馬鹿にされとこ。

わかる。

彼女：どうしてこんなに余裕なの？  
わたしには余裕なんて残されてなかつた。

受話器を持ちながら手が震えていた。

（助けてよリュウタ…あなたは今どうしているの？）

「何？なんであんたがこの携帯で私に電話してくれるの？彼はビルでいるの？」

ミクは千理に負けないよう、必死で平然を装つた。  
千理はもちらん余裕で返す。

「何でつて千理はリュウタくんの彼女だからにきまつてんじやん？  
リュウタくんがどこにいようがあんたに関係ないし、どうでもいい  
じゃん。」

千理はくすくす笑つて言った。

胸の中がざわざわして頭に血がのぼる。

「リュウタ昨日、彼女と別れたって言つてたよ。それにだいぶ前から別れたいって言つてた。」

（どうだ！）

言つてやつた！って感じだつた。

実際ミクが彼女だったらこんな事聞い・・・、彼とこれ以上どうしたいと思えないだろう。

彼が私と会つていた事、昨日の夜の事、その上こんな事を前から言つているんだよ？

傷つけばいい。

早く彼を嫌いになつて、どつか遠くに行つちゃえばいい。  
もうどうでもいい、

あんたが邪魔なの。  
どつか行つちやえ！！

私はどんな嫌な奴になつてもかまわないと思つた。

彼が好きになつてくれるなら後はもういらないと想つたんだ。

千理はそんな事で同じじる女じゃないのに。。。

強がつた。

「リュウタくんがそう言つたの？」

千理が不機嫌そうに聞いた。

「そうだよ、携帯勝手にいじられるの嫌だしづがまだし別れたいつて！」

ミクは震える声で返した。

「ふーん。あ、そう。」

千理はさらりと聞き流す。

ミクのイライラはバークに達していた。

（何この人…どうしてこんなに平然としていられるの？私が電源を切っていた数時間の間に何があつたの？？）

どんなに平然を装つたところで、動搖を隠せずにいた。  
胸の奥に広がる不安…。

どうして…？？

駄目だ…。

気が付くと、ミクの頬にはぽろぽろと涙がこぼれていた。

こんなとこで負けられないのに…！

胃がきりきりと痛み始めた。

彼女の声、数時間の間の出来事、何もかも、理解できなかつた。

「ミク、大丈夫？」

受話器に耳を近付けながら、多香子もテンパっていた。答えられずにいる私に、千理は言葉を続ける。

「リュウタくんに全部聞いたの。そりやショックだったよ。やつぱ信じてたし、まさか何？そんな風に一人で会つてたなんて想像もしてなかつた。千理の事とか相談してるうちに何かよくなつちゃつて？冗談じゃない！！でも千理別れる気ないしリュウタくんの事許してやり直すからもうかかわらないで！！！」

千理が強い口調で言った。

「つてゆうか相談してた？つて何？リュウタは確かにずっと彼女と別れたいって言つていた。でも相談なんてされた覚えは一度もない……。よく解なんいけどそういう事になつているらしー。」

するい男。

それでも私達は彼が好きだつた。彼の嘘に振り回されて、傷付いて、

それでも彼が好き…。  
手放すなんてできない。

「あんただつて人のメールとか見たくせに…。」

千理がぼそつとつぶやいた。

「…」何も答えられない。

「何とか言つたら？」

「…初めは…二人を邪魔するつもりじゃなかつた。ただ、好きで友

達としてでもいいから、もう一度会いたかった。でも今は、私も本当に彼とつき合いたいと思つてゐる。」

「向うれ？会つてゐる時点でもう邪魔だし、もう一回なんて、虫が良すぎるんじゃない？」

確かに千理の言つてゐる事は間違つてゐない。

それでも今ここで引くちやつたら、彼と私はもう…。

「彼と話したい。彼を出して。」

「絶対嫌。」

千理の強い口調はミクの弱々しい声を遮つた。

「もともとあんたがリュウタくんを捨てたんでしょう？それを私がもひつたの。もうあんたにリュウタくんを渡すつもりもないしあんたにはそんな権利ない。」

「…………。」

「千理はリュウタくんを離したりしない。千理はリュウタくんと結婚する。もちろんあんたはその式にも呼ばれない。どうかで他の誰かと幸せになればいい。もう一度と私達の邪魔をしないで。」

リュウタとの将来を語つてみせる千理を心から憎いと感じた。多香子も黙つてそれを聞いていた。

千理の言つてゐる事は否定する隙もないくらい正しくて、私の考えたくなかった現実をズバズバと言つてくるその態度も、強くて、自信に満ちていて、

それだけで、何だか心の中が痛くて、辛くて、

私は途方に暮れていた。

「これ以上句を話せばあの過去を、この想いを、清算できるって呟つ  
の？」

「あんたリュウタくんとやつたんだら？？」

「…え？」

「やつたならもつたって言こなよ。いいんだよ、一回くらこびつ  
て事ない。千理、リュウタくんとこれからもこくらでもそんな事で  
きるし今までだつてそうしてきた。一回くらこびつて事ないから。」

「やつてないよ。」

「嘘付くな！」

千理の口調が強くなる。

「つ、コ、ウタがそ、う、言、つ、た、の、？」

「ああ？」

確かに…

昨日の夜…ミクとリュウタは体を重ねてキスをした。  
でも、そんな中途半端な状態で、千理とリュウタに比べたら、  
本当にやつたとは言えなかつた…。

余計空しくなるだけだ…。

「やつてないよ。」

悲しいけどそう答えた。

同時にそれは、ミクの負けを決定付けた瞬間だつたのかもしれない。

「あ、そう。」

千理は不満そうに言った。

「千理、電話するまであんたがどんな嫌な女のかつて考えてた。でも、意外と性格は悪くないみたいだし、すぐに新しい恋できると思うよ。」

「余計なお世話だし。」

「まあ、今回は運がわるかつたけど、人生は長いんだからさ。これからいくらでもいい事あるつて…！」

千理は何だか楽しそうに笑つて言った。

彼女なりに強がつていたのかな…。

ミクはそんな彼女がやつぱりムカついた。

「どうして？ 彼はどうしてこの子なの？  
どうして私じゃないの？？」

彼女の声が耳に残る。

心の中に、モヤモヤとした寂しさだけが広がつて行く。

また明日から、またあの灰色の景色をかんじるのかな？

自信はなかつた。

ただ、一心に彼との復縁を願う気持ちだけがミクの気持ちをかりたてた。

それから堂々回りの一人の会話は1時間くらい続いた。  
最後の方はもうあまり記憶がない。  
ミクも千理もただ必死に、自分の事を喋るだけで、

リュウタの気持ちなんて考えられない…。

なんて滑稽なんだろ？私達。

悲しい気持ちが広がって行つた…。

私は返す言葉を失つて、

千理もだんだんと静かになつていった。

そして静かに千理が最後の言葉を述べた。

「どんな女のかつて考えてた。すっげームカついてたし今もムカついてたけど、そんなに性格は悪くないみたいだね。あんたならきっとすぐ次の恋ができるよつて事で…。」

「…。」

「まあ今日は諦めてよね。」

「…。」

「残念、無念で、サヨウナラ…。」

ザンネンムネンデサヨウナラ。

私は絶対忘れない。  
屈辱的で、悲しくて、こんな思いは、  
自分のせいなのにね。

それならだね。

涙が止まらなかつた。

止まらないどころじやない。

後から後から続いて行つた。

昨日の事はもうまるで幻みたいだつた。

あんなに嬉しい夜はもう一度と来ないと思つたのに…。

まさかこんな形で現実になるなんて…。

思いもしなかつた。

何とか繋がつたリュウタとの電話もとても味氣ないもので、  
私の（もしかしたら…。）なんて都合のいい期待もすぐに裏切られ  
る。

リュウタは淡々と落ち着いた口調で話しだす。

「ごめん、やり直すつて話しあつたんだ。もうどんな風に思つてくれても何て言ってくれても構わないから…。」

弱々しい口調…。

でもハツキリ感じられたのは、昨日までは違う他人行儀なそつけ  
ない声だつて事。

「嫌だよ…もう会えないなんて嫌だし、わけがわかんないよ。」

泣きながら何度も私は「会いたい」と言つ。

リュウタは冷たくそれを突き放す様に、

「駄目なんだ。もう会わない。」めん。

そう繰り返すだけだつた。

「あたしが電話切つてたからいけないの? ハッチできなかつたから  
いけないの? 何で?」

何で? どうして? ?

疑問は膨らむばかりだつた。

だつてそうでしょ? ?

あんなに期待させておいて、  
あんなに喜ばせておいて…。

全部あたしの勝手な一人よがりだつたんだ。

みじめで、情けなくて、

消えてしまえたらいいのに…。

リュウタは言葉を濁すだけで、  
あいまいで、気持ちがどこにあるかさえちやんと教えてくれない。  
するによ…。

どんな理由でも、言い訳でもいいから、  
納得できる説明が欲しいよ。  
嘘でもいい、何でもいいから、

ねえ、私から田をそらさないで…。

今、聞かなきや。

じやなあももう一度…

解つていた。

でも、リュウタは、乾いた声で何度も「『めん。』と言つだけ。

「解つた…。」

小さく呟いて私も電話を離す。

何気ない夏の始まりの一日。

だけど私にとってあの日は、人生が終わつたって言つてもいいくらい、

悲しい一日。

## あれから

あまりにあつけないリュウタとの出来事から数年が過ぎようとしていた。

結局現実なんてはかない物で、

ドラマや少女漫画みたいに、簡単に再会したり復縁するなんてできず、

もちろんリュウタとも本当にそれ以降出会う事はなかつた。

あの後のミクにしても、

ドラマとかならきっと、立派に立ち直つて、

彼に再会するなり、自立してキャリアウーマンになるなり何なりしているはず。

だけどね…。

実際のミクはあの後すっかり変わつてしまつたよ。

ミクは自信をなくして、恋にものめり込めなくなつたし、  
バンドもバイトも結局しなくなつて、友達関係にしたつて、  
何だか深い関係になつて、サヨナラするのが嫌だとしか考えられなくなつた。

何より、そんな風にしか思えない自分の事は大嫌いで、  
これでも色々と努力したんだ。

でもそれも何だか間違った方向に行ってしまった…。  
特に、ミクがあの後一番後悔した事と言えば、

リコウタとちやんと一回もエッチしてない事…。

恥ずかしかった。

彼女に問いつめられても「してないよ」って答えた。  
女として、とても情けなくて、みじめだつた。

リュウタとの事が過ぎ、季節が秋の終わりを告げる頃、  
バイト仲間のみちやんに頼んで、適当に男の子を紹介してもらつた。

リュウタと別れた後、ご飯も食べれなかつたし、すくなく不安定にな  
つてて、  
やつと1か月、2か月立つた… そのくらいの時期だ。

とつあえずミクはその男友達に会つて、

「まあ、行く所ないし家行こうよ。」と簡単に声をかける。  
彼も彼で、ためらいもせず、私を部屋に入れた。

「前、電話で引きずつてる女の子がいるって言つてなかつたっけ?  
彼は笑いながら見知らぬ女の子のプリクラをゴミ箱に捨ててみせる。  
「何の事だっけ?? 忘れたよ。今はミク一筋だから…」  
そつ言つて、ミクの体に手をかけた。

（嘘ばつかり……。）

そつ思いながら、ミクも彼に手をかけて、

まあ、いつか…。

そつしてミクは処女を捨てた。

ちなみに“初めでは本当に好きな人じゃなきゃ後悔する”なんてよく聞くけど。

ミクはヤレヤレって感じであつたりそれを済ませてしまった。  
むしむし、コレでやつと千理と同じ“女”になれたなんて考えていた  
し。

私はまだリュウタを忘れられなかつたんだ…。

そんな事をしても、

もうリュウタとは体が触れ合つ事も、会話をする事さえないと解つ  
ているのに…。

彼は軽い口調で言つ。

「ミクつて本当に初めてなの?そつは見えないけど。緊張したりし  
ないんだ。」

「うん。別に普通だつた。」

私もサラリと答えた。

リュウタとは2年もつき合つたのに、ドキドキして全然できなかつ  
たし、  
再会してからも、緊張して最後までできなかつたつて言つて、

なんて簡単な事なんだろう…。

もつと早くこんな経験をしていれば、  
最後の夜もきっと失敗しなかつたに違いない。  
私は、初めて会ったばかりの人と簡単にしてしまった事より、  
リュウタとしなかつた事への後悔を募らせた。

そしてそんな感じで結局彼とつき合つて、  
月日を重ねるうちに愛着も湧いて来て…。

だけど結局煮え切らないミクの態度にしびれをきりじり、  
彼は元彼女と浮気して…  
大して悲しいとも思えずにその恋も半年で終わつた。  
それでも（よく持つたなあ…）なんて考えていた。  
もつあんなに傷付いたりはしなかつた。

免疫ができているのか、恋ではなかつたのか…。

そんな恋愛が、高校を出ても、専門に入つてからも、ずっと続いた。

合コンとかして、誰かと出会つて、恋をして、  
電話や、メールで簡単に「好き」とか「嫌い」とか、  
リュウタには言えなかつた…でも、

自分でも解らんいうらい簡単に、いくつかの恋が通り過ぎて行つた。

自分で中で言い聞かせていたんだ。

（ココウタはあの日死んじゃったんだ）なんて…。

だってそりでしょ？

夫がもしも行方不明になつたら、妻はきっとこつまでも家で待つに違ひない。

だけど、未亡人だとしたら、

夫の想い出を胸に、違う人と再婚とかして、それなりに幸せに生涯を終えるんだ。

きっとそういうもの…。

だからリコウタもあの日、去つていつたんじゃない。

死んじゃつたんだ…。

ミクは何年もの間、じつじつリコウタへの気持ちを断ち切つて来た。他の彼女を選んだ彼を、待つていられる程強くなかったし、人並みの幸せが、私には必要なんだつて思つていた。

だけど、現実は残酷な物で、

何度も何度も夢の中でリコウタと会つては悲しい気持ちになつたし、实际上も、コンビにやら、近所の道で、彼を見かけてはため息が出来る。

地元の同級生だから、顔を合わせる事は何度かあった。

（そりやそりか…）

車校でリコウタを見つけた時も、悲しい事にドキドキして、すぐにある気持ちが蘇つた。

勇気を出して話しかけると、

彼は何でもない笑顔で、「久しぶり」と笑った。

私はもうあの事は口に出せずに、久しぶりにあつたただの知り合いつて感じで、

毎日彼の登校時間にあつたをし、タマにジュースをおひつてもらつたり、

そんな風にしているうちに、私は免許を取つて、

卒業後は電車にものらなくなる…また一つ彼との会つ機会を失つて、

全然楽しいと思えなかつた。

悲しくていつもいつも、あの頃の想い出が胸を締め付けて、汚染されていて、

成人式が近付いていたあの頃も、本当に毎日が鬱で仕方なかつた。

リュウタは来るだらうか…話ができるだらうか…。

緊張しながらも、期待、それから、これを過ぎたら今度こそ最後。この気持ちにピリオドを打たなければと、プレッシャーを感じていた。

そしてその日、友人や昔の担任との再会が嬉しくて、私は気分が良かった。

リュウタももちろん来つてホッとした。

少し髪を短くして、スーツを着た彼はとても落ち着いて見えて、また私はドキドキしていた…。

彼の性格はもう何となく解る…。

話しかけてくるわけ絶対ない。でも…

こっちが笑顔で話しかければ、何事もない態度で会話してくれる。ミクはカメラを持ってリュウタに近付いて「撮つて。」と言った。

「え？ 別にいいよ。」

嬉しいとも迷惑とも取れない強張った笑顔でリュウタは私の横に並ぶ。

過去につき合っていた一人のぎこちない写真は、ミクの宝物になつた…。

その後の飲み会でリュウタと会つた時、二人きりにもなれたけど、怖くて何も言えなかつた…。

「彼氏できた？」

何気ない彼の質問に、

勝手に期待して、顔が赤くなつた。

でも…

もう…今更…

気持ちは伝えられずに、

どうでもいい仕事の話とかして、飲んで、リュウタが帰る頃には、

もう、どうしようつて

だけど言えなかつた……。

そんな事を繰り返したまま、

もうあの18の夏から毎夏を送るよ」といった。

岡山に着んで、一秀子からござつた。

“ミク、元気にしてるかな？”  
サロンやめたんだって？ビックリした。  
透子はこっちで赤ちゃんを生んだよ。驚いた？  
赤ちゃんの写真送ります。ミクにもいつかそんな日が来たら写真送  
つてね。”

ミクは赤ん坊の写真を見て微笑んだ。

四月に専門学校を出て、ミクはエステティシャンになった。研修の為一時的に大阪で暮らす事になり、透子はその時一緒に暮らしたルームメイトだ。

大阪ではすこく仕事が辛かつた反面、都会で、刺激があつて、

友達もまた、皆県外で、言葉もバラバラだし、そんな環境の中で、皆深い仲になれたし、地元の友達には言えない様な話もいっぱいできた。

透子はその時、6年になる彼がいると言っていた。

奇麗で、いくらでもモテそうなのに、ついにその彼と結婚したと言う。

「途中で他の人好きになつたりもしたよ。彼と別れるわけでもなかつたのに、すぐはまっちゃつてね。結局我慢できなくて1年後に告白した。何したいんだお前的に言われてさあ、そりや返事する方だつて困るよね。でもすつきりてきて迷いもなくなつたけどね。」

そう言つて透子は缶ビールを片手に笑つっていた。

懐かしいなあ……大阪。

私は窓を開けて夏の氣怠い空気を感じていた。

新大阪のマンションにいた頃、9階のベランダは夜になると夜景が奇麗だつた。

普段は飲まない私も、透子とよく乾杯したもんだよ。

そんなに昔の話じゃないのに、透子はもう知らない町でお母さんか  
……。

はあ……。

ため息が出た。

多香子もいつの間にか、昔引きずっていた彼を忘れ、今は職場の先輩と一緒に歩いている。

亜子や菜穂もそれぞれ進学して、目標を持つているみたいだ。

大樹も仕事に燃えていて、

皆、皆、変わって行つた。

きっと、

リュウタもあたしの知らない所で知らない大人になっているんだろう。

私だって変わらないわけじゃない。

実は私にも、つき合つてもうすぐ3年になる彼がいた。

今までの恋愛に比べたら、穏やかで、とても落ち着いた関係にある。ただ、心の中で、リュウタを忘れていない自分に罪悪感を感じていなわけじゃない。

だけど、今の彼とは、

あの頃とは違つたもつと穏やかな恋愛以上の事をきっと得られる。

だから3年持つた。

だけど今でもやつぱり解らない。

自分が誰との先恋をしたり結婚したり…子供を産んだりとか…？  
？？

同級生達はどんどん結婚して家庭を築いて、  
きっとリュウタだってそのうちそんな日を迎えて…。

私はその時じう感じるんだりうへ。  
私はじうなるんだりうへ。

幸せな毎日を過げしながら、  
今でも切なく思ひこんだ。  
それはもう二度と戻らないあの夏の日の話。

短い恋の物語。

「んにちは。  
アシンメトリーをここまで読んでくれてありがとうございます。  
この章はあとがきになります。

とりあえず全部書き終えられました。  
気持ちに整理が着いたかは謎ですが、とりあえず終了!  
ちょっと寂しいです。

この話は実際に私が高校生の時の事を書きました。  
登場する人物も全部実在しています。

ただ、私一人の主観と、覚えていいる限りの会話や情景であって、  
本人達が何を思つてたかなんて知りませんけど！（あはは。）

この話を書いて、

自分で読み返して、本当に本当に、

沢山の事を今も覚えている自分にびっくりします。

あの恋は終わつてしまつても、

私は絶対に忘れないし、

彼を嫌いになる事もないでしょ。

例え今、この先、誰が隣に居ようとも変える事のできない、  
とても思い入れのある過去の大切な出来事です。

本音を言つてしまえば、

今更でも何でも、一度彼と会つて、

もつとあの時はどうだったとか聞ければもつとすつきりできるけど、  
彼はもうきっと全部忘れちゃったんだろうな。  
どんなに大事に思つても、私の記憶の中だけにしかない、物語みた  
いな物かもしれない。

だから、今はもう彼と会つ事はありません。

会つたとしても怖くてそんな話できんだらうーーとか思うし、  
何より、今ある幸せをぶつ壊すのはどうだらう…疑問です。

ただ、あの数カ月間の事を、  
私はずっと覚えていたい。

あんな風に誰かに執着できたのはきっと若かつたっていうのもあつ  
て、  
大人になつていくこれから、あんな激しい気持ちを感じる事はきっと  
もうないから…。

何だか現実つてシビアだよね。

もう戻れない昔の事に輝きを感じたり、  
今に不安を感じたり。

ただこの話を、一人でも誰かが読んでくれて、  
時々思い出してくれば寂しさも和らぐと思います。

私の気持ちを誰かが知つてくれている。

その事がとても励みになるし、救われます。

一人じやない。それを確信できる。

そしていつか、

彼とまた出会つて、

何でもない話を普通にしたいなと思つ今口Jの頃です。

尊いけど想い出は時に悲しい。

そんなこんな感じですね。

最後に… Jの話を読み切つたよー…つて方、

お気軽にメツセージ下さいね

感想待つてます

アドレス書いてもらえたもちろん返事かきます。

(ただし、文法とか小説としての評価は素人だから許して下さい、  
(涙)

では、まだどこかで… わよひならーーー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0485a/>

---

アシンメトリー

2010年12月13日20時35分発行